十三鐘
絹懸柳

妹脊山婦女庭訓

座本　竹田新松

序詞頭直位す。敷津八洲の三器。智たり仁たり英勇の。利劍四夷を刑し。和らぎ治む和歌の道。八つの耳をふり立てて小牡鹿の聲彌高く。曲れるを直きに置く。操久しき君子國。榮枯交々皇の。寶祚傳へて三十九代。天智天皇の宮居なす。オロシ〈奈良の都の。冬木立。地日の本の聖主たる君萬乘の御身だに。暗き盲の御惱み天地に日を失ふ如く。堂上堂下これを痛み時々の評議も外ならず。玉座の左は蘇我の蝦夷大臣。政務を預かる威に蔓り。我意驕慢たる其勢ひ右の座には安倍中納言行主。庭上の勤臣には大判事清澄守護の武功を立烏帽子。素袍の袖もたをやかに。同じく此方は蝦夷が家臣宮越玄蕃。其外百官百司の面々フシ威儀を。正して伺候ある。地蝦夷寛然と上笏し。詞改めて言ふに及ばねど。帝盲とならせ給ひ。神例故實日々の政務。行はせ給ふ事能はず。老身の此蝦夷悉く是をはからふ。悴入鹿の大臣は病床に引籠り。又。進出でて力となるべき鎌足の大臣には。假初にも虚病を構へ。行事を捨てて引込む料簡。疾より帝へ奏聞遂げ。今日は鎌足を呼出し。事を糺すに一決。それ故使を立て置きたりと。地己が邪智を押し隠しさかしら言ぞ。フシ是非もなき。地中納言進み寄り。詞蝦夷公の仰せもさる事ながら。忠勤正しき鎌足大臣。何を以て野心あらん。地再三思慮を廻らされ麁忽の計らひなき樣にと。仰せも待たず宮越玄蕃。詞コハ行主公の詞とも覺えず。君の叡慮を安んぜんと。老身の疲れも厭はず。忠勤一途の蝦夷公。麁忽の奏聞あるべきか。地歌蹴鞠に日を暮し政務を知らぬ馬鹿公家と。一つ口には申されずと。傍若無人のお主贔屓大判事居直つて。詞ヤア陪臣の玄蕃過言千萬。堂上の論談は君子の評ひ。其方達が知る事ならず。下つて居やれときめ付くれば。イヤ陪臣でも陪臣でも。理非を正すに遠慮はない。今一言ゆつて見よ手は見せぬと。地詰めかくれば此方も鍔元くつろげて。既に斯うよと互の爭ひ蝦夷聲かけ。詞ヤア〈清澄玄蕃めも差控へよ。無禮至極と制する折から。地取次の青侍罷り出で。詞武官の方々へ御願ひの筋候とて。先達て相果てし太宰小貳の後室。押して伺候仕ると。地呼ばはる程なく入り來る。太宰の後室定香とて媚も

粧もさだ過ぎてオクリ世を捨て。草の二つ髻。木ッシ打掛さばきしとやかに。地階近く兩手をつき。詞恐れながら申上げます。過行きし太宰小貳。五十日の忌明も相濟み。何卒娘雛鳥に。似合はしき聟をまうけ。太宰の家相續の御願ひが申上度く。つひに上らぬ雲の上。地慮外はお赦し下されと。會釋の顔もッシ紅葉せり。地大判事打向ひ。詞某取次を申上げ御伺ひ申すべけれども。小貳殿存生より。此淸澄とは遺恨ある家。取次して叶はぬ時。私の意趣により。依怙の沙汰致したなどと疑はれては詮がない。ソレ玄蕃取次がれよ。ヲヲこれ幸ひなに定香殿。兼て主人蝦夷公にお願ひ申し。貴方の息女雛鳥殿。某が宿の妻に申受度く。色々と申せども。今に何の沙汰もなし。只今のお詞で。拙者も安堵致したと。地思ひも寄らぬ聟がねに。とかうの返事ひ兼ねてッシ差俯向いてゐたりける。地行主耳にもかけ給はず。詞ヤア〳〵定香玄蕃が願ひは内意のこと。何れの内奏聞遂げ。家名相續の沙汰あらん。ア、有難うござります。地長居はおそれと押付けの。聟の評議を免がれて。御前をッシづ〳〵立歸る。地君は御惱の奥深き。帳裡を出づる采女の局。蝦夷大臣に打向ひ。詞帝様の勅諚あり行主様にも聞し召せ。鎌足大臣に野心あるの奏聞。今日御殿へ招き寄せ。事明白に糺すべしとの綸言なり。地父上を召しまして何事も聞き給はれと。スエテ打濕り宣へば。地蝦夷大臣居丈高。詞鎌足大臣遲參は審し。又も使を馳せ候へ

と。地呼ばはる折から參内と案内して。入り來る鎌足大臣。中納言座を讓り給へば。押し直つて蝦夷に向ひ。詞今日某を改めて召さるゝこと。何事やらんと宣へば。地采女の局進み寄り。詞父上へ申します。とくより病床にまし〳〵て。久しく參内なき事を。諸卿野心ありとの疑ひ。忠勤厚き大臣。何か曲れる心あらん。速かに言ひ開くべしと有難き勅諚と。地聞きも敢ず蘇我の大臣。詞鎌足の大臣とは主上の左右を助け合ひ。水魚の交り厚ければ。捉を正すに遠慮はならぬ。只今貴卿に見する物あり。彌藤次參れと呼ばはれば。地あつと答へて荒卷彌藤次ッシ一つの箱を携へ出で。地御前に直し引きさがる蝦夷件の箱打開き。詞五日以前春日の社壇へ。何者とも知れず奉納の此一箱。中には一つの鎌を入れ。男子誕生平天下と書付けたり。其方の娘采女は。斯の如く君にかしづき。誰及ばぬ寵愛。男子誕生あれば鎌足殿は自然と外戚。平天下と書添へたるは。四海を乘取る心の所願。鎌は鎌足の家の寶。外に類のない重寶。其影の鎌を新たに鍛たせ。奉納ありしは餘人でない。覺えないとはいはれまい。サア返答あれ鎌足殿と。地思ひも寄らぬ印の鎌。數多の公卿呆れ果てッシ口を。閉ぢてぞ居たりける。地鎌足大臣思慮を定め。詞此身に取つてかつ以て覺えなけれど。眼前疑はしき影の鎌。反逆の者あつて。我を罪に落さん結構。此惡黨を見出す迄は。申分けても詮なき事。我は暫く禁裏を避け。何れへなりと蟄

興行の番附

居せん。ホヽウ其身のあかり立つまでは何れへなりと蟄居あれ。ソレ〳〵玄蕃彌藤次。門前へ送り出せ。地早ろ〳〵に采女の局。何故申譯を遊ばさぬ。コレなら申し父上と歎き諫める中納言。耳にもかけず鎌足大臣。しづ〳〵ッシ歩み出で給へば地蝦夷を始め數多の諸卿早や退散とたつか弓。武勇たゆまぬ清澄も。覆へる雲に。是非なくも。心の駒の控へ綱。荒卷宮越索袍の袖。肩臂はつて歸館の警固。利を隱せる鎌足は心に。はかる七重八重。馴れし九重振り捨てていづくの空やはかりなき後の榮を松の色。操變らぬ君が代の例久しきユリ。大三重地春日野のッシ社頭に近き。地小松原時雨晴間の狩戻り。大判事が嫡子久我之助清舟。美男とも美童ともさたに聞えし角前髪オクリそれとは。見せぬ養笠に。ッシ振擔げたる吹矢筒。詣で休みの捨床几。是幸ひと腰打かけ勞れを休むるッシ其折から。地本社の方より下向の一群。派手を揃へる風俗の中に際立つ武家育ち。年は二八かそれぞとも振の袖のみ澤標ゆたの。たゆたの絹かづき。腰元數多引連れて。打過ぎながら振返り見合す顏も清舟と互に月よ花の香の。こぼるゝ愛につつくりと。ッシ思ひに惱む立姿。地氣轉きかして腰元ども。詞コレ桔梗殿。今日はマア餘程の道。お上にも嘸お草臥。こちらの床几で一休み。ヲヲ小菊殿よう氣が付いたと。地附々どもに誘はれ腰と思ひをかけまくも。神の敎のえにしかと心の內の嬉しさに。雛鳥は只清舟が。ッシ姿に見とれ餘念なし。詞イヤ申し御寮人。最前から見ますれば。アレ彼方の持つてござる遠目鏡の樣な物。不思議に思召すのであろ。不躾ながら私が往て。借りましてお目にかけうナウ桔梗殿合點かと。地點頭き合うて隣の床几。小腰をかゞめ會釋して。詞イヤ申しあなた樣に。御無心がござります。此方の御寮人の申されますは。お前樣の持つてござる其遠目鏡の樣な物。暫しが間お貸しなされて下さりませと。地云ひかけられて。コレハ〳〵安い事。是は小鳥狩を致す吹矢筒と申す物。ムヽそうしたらこれが吹矢筒でござりますか。申し〳〵御寮人樣。是をマア御覽じませ。雛鳥でも大鳥でも。アレあなたの吹矢を持つて。くつしやりと射なさるのぢや。マア此筒をちよつと握つて御らうじませ。どの樣な所へでも。心よう屆きさうな。長あい物でござりますと。地清稽交りの戀の橋。岩木にあらぬ清舟も。につこり笑顏相惚れに。下行く水のこぼれ口。掬ひ上げて桔梗が氣轉。地コレ申し御寮人樣。早う埒の明く樣に。思ひのたけを仰しやりませ。何をマアいやるやら。ついに逢見ぬ

あのお方へ。地どうマア直にいはれうぞ。わしや恥かしいとッシ袖覆ふ。地折から社の境内より蝦夷が家來宮越玄蕃。鑓挾箱いかめしく代參の戻りがけ。此場の體を見るやいな供に制して挾箱。ッシ腰打ちかけて窺ひ居る。地かくとも知らず腰元小菊。詞コレ申し前髪のお侍樣。私が方の御寮人樣。申したい事があれど。恥かしうござりますけな。幸ひな此吹矢筒。咄に聞いた呰き竹。どうぞ聞いて上げましてと。地耳と口とへあてがうて。かう此中を私が持ち。取りも直さず媒役。雛鳥は筒へ手を。思ひありたけ一口に。いへば此方は耳で受け。打領いて返り言。可愛いらし事通じ合ひ。ッシ互に嬉しさ羞紅葉。地玄蕃主從夢現。腰元どもは氣を利し二人を床几へ押しやれば。扇を開き寄添つて。口と口とを鴛鴦のひつたり抱付く此方には。ぐわつたりどつさり挾箱こけ落つるやら鑓持は。鑓をこかして立騒ぐ清舟も打驚き。床几を退けば宮越玄蕃起上つて砂打拂ひ。地ヤア久我之助殿。餘つ程に味やらるゝ。イヤ其處な相手は過ぎつる頃相果てし太宰の娘。コリヤ興がるわ。コリヤよい所へ出くはしたと。地聞いて二人は又悔り。詞ム、扨は太宰殿の息女なるか。お前は大判事樣の御子息久我之助樣か。ホヽ過ぎ行かれし其方の父。太宰の小貳と我が父とは。故あつて遺恨ある家。その息女とは夢にも知らず只今の爲體。そんならお前に添ふことなりませぬか。ハアヽ地はつとばかりにはや涙。宮越は聞咎め。詞スリヤ兩人は早やちえ〳〵くつたよな。アヽいやこれ必ず麁相いはれな。遺恨ある家とも知らず。最前の時雨の內同じ床几に雨宿り。ムヽなる程。今の雨宿り。それならそれにして置かうが。一體此雛鳥には某が大執心。それ故宿の妻に申受けんと。彖て主人へ願ひ置く。ハテ今迄の事は。たとへ如何樣な事あらうと儘よさ。此後心に隨へば其處はぐつと了簡する。これはマアきつい粹樣。私は雛鳥の召使小菊と申す者でござんす。眞にマア浮世ぢやナア。入鹿樣の樣な聖人といはるゝ。情深いお方の親御に。アノ意地悪の蝦夷樣。其御家來の小意地悪。此方の御寮人を嫁にせうとは。ヲヽ笑止と打笑へば。地玄蕃睨付け。詞ヤイ〳〵〳〵女め。其過言覺えてをれ。これから直に御所へ馳行き。二人の樣子を觸れ廻り。何奴も此奴も身の上と。地駈出すを腰元ども。袖にすがつて詞アヽコレ申し。今の樣にいうたのは。お前樣のお心を引いて見る謀。ヲヲ正直なお方ではあるわい。ムヽスリヤ身がいふ樣に取持つか。取持たいでよい物かいな。ヲヽそれなれば了簡する。サ

アお娘が眞實に應といふか。ソレ最前ちらと見て置いた。吹矢筒の呼竹で聞きたい〳〵。扨も目早いお方ではあるぞ。お望みの通り。呼竹で御返事を聞かしませう。サア〳〵耳へおあてなされ。地ヲツト心得吹矢筒耳に押當てッシ居合腰。詞サアどうか〳〵コレ申し雛鳥樣。よいお返事を早う仰有れ。ア、コレ申し玄蕃樣。恥かしがつてでござります。ちつとの間お目を塞いで。ヲ、〳〵〳〵〳〵成程々々それも合點と眞赤いな。地顏に似合ぬ成佛眼。小菊は心得有合ふ吹矢。筒へ差込み口押當て。ふつと吹けば宮越が耳へくつさりアイタ、、、。エ、こりや如何しをると狼狽へる。其間に雛鳥打連れ立ちッシ館へこそは逃歸る。地玄蕃は吹矢拔き取つて。堪忍ならずと追つかくるを。久我之助押留め。詞ア、コレ高が女の戲事。彼是いふ程却て恥辱と。地宥むる此方の岨道より。數多の侍走り着き。詞清舟殿これにござるか方々とお尋ね申した。先刻采女の局樣禁廷の御殿を脫出で。いづくともなく行方知れず。貴殿事は采女樣の傅役。地早々お知らせ申すと。聞いて驚く久我之助。詞何采女樣御行方知れずとや。ム、何にもせよ程はあるまじ。貴殿方はこれより直に所々の出口を吟味あれ我は山手を詮議致さん。ホ、聞捨ならぬ采女の出奔。蝦夷公へ注進せんと。地玄蕃諸共數多の侍。ッシ出口の方へ急ぎ行く。地跡に清舟只一人。ハテ心得ずと一思案。胸もしどろに入相の。ッシ山手をさして歩み行く。地向うより來る人音に。身を除けてやり過せば。さもやどとなき內裏上臈。ッシ心も空に歩み行く。地袖を控へて。詞采女樣でござりますか。ヤア久我之助か。ハア只今組下の注進あつて。采女樣には御殿を脫出で御行方知れずと申すが。如何なる御所存あつての事と。地問はれて辛き物語。詞其方も聞及ばれん。蘇我の蝦夷威勢に誇り。わが娘橘姫を后に立てんと豫ての望み。妾君に思はれ參らせ。地夜の御殿晝の孕暫しもお傍を離れぬ猜み。詞父鎌足樣をも讒言して大內を遠ざけ。何方にお渡りありとも。此身さへつゆ知らず。地妾が傅き參らす程。帝樣のお身の仇誠ある入鹿の大臣。父蝦夷を諫め兼ね。引籠り給ふ由。それ故父の隱家を尋ね求め身を隱し。妾をかへる身の望み。只見遁しに賴むぞとスエ跡は涙にくれ給ふ。詞ハ、此身は傅きの役目なれど。後日の難儀少しも厭はず。御身の爲又第一は天子の御爲。成程落し參らせんが。地諸士ども方々手配致せば。村口を御供申し瞞つてお通し申さん。先づ〳〵これをお召あれと地件の。簑笠きせ參らせいたはり出づるッシ出口の方。

地又も大勢足音して。以前の武士ども走り着き。宵闇紛れ透し見て。地久我之助殿未だこれにか。出口々々を吟味せしがお局の行方知れず。ホヽ拙者は山路吟味の上。コレ。これに居る百姓が。怪しき人見付けて注進。未だそれとは極めねど大方は采女の局。我はこれより此土民に案内させて吟味を遂ぐる。各は此趣急いで禁裏へ奏聞あれ。ホヽ畏り候と。地皆々勇み大内へ。こなたは憂身隠れ簑笠に。涙の天が下。清き心の清舟も共に。しぐれて。三重へ行く空は。地九重の。ッシ榮えに隣る一構。三條の御所と持囃す蘇我の蝦夷が廣館。雪見の亭を設けの座。女小姓を肉屏風宥りに透間中庭の蔭を。轉ばすつかね雪。冷たさ怯え主命の重き役目と宮越玄蕃、跡に荒卷彌藤次が臺に。乗せたる雪人形各。ッシ機嫌を伺ひける。地女中達口々に。詞是は〳〵御兩所のいかい骨折。殊に此雪細工兎の耳がきつい手際。ヲヽ、枝折殿の云はしやる通り。束帶姿の此人形。綺麗な事ぢやないかいなうと。地擽めそやされて兩人は。大人氣なくもッシ出かし顔。地蝦夷莞爾と打笑み給ひ。詞ホヽ、玄蕃彌藤次出來た〳〵。地イザ酌取れと餘念なく廻る盃養老の。盡きぬ泉の底はかと。案内もなくッシ廣庭傳ひ。地入り來る二人の僧。彌藤次見咎めヤア〳〵兩僧。詞何用あつて罷り通る。御前なるぞときめつくれば。イヤ我々は御領分に住職致す。文聖寺八乘寺。佛法歸依の入鹿樣。今日行法の滿願の日なれば。拜禮に伺候せり。地罷り通ると奥庭へ。入らんとするを蝦夷は睨付け。詞ヤアいらざる入鹿が佛三昧。うぬらも其組下か。忝くも日の本の神の守護ある我が館。奥の亭へ通らんなどとは。其身を知らぬ賣僧ども。地首をならぶる覺悟せよと。(氣色變れば。詞アヽ、申しお前樣が佛嫌ひとは。夢三寶存ぜぬ事。命はお助け下さりませ。アヽ、これも亦お嫌ひか存じませねど。拜みまするとと地手を合せ。身を顫はして。青ざめ顔。詞ホヽ、首引抜いてくれんずなれど。取るに足らぬづくにふめら。ソレ玄蕃彌藤次兩僧が衣を剝ぎ。月代を奴に剃立て門前へぽつ拂へ。それを看に又一獻。腰元共用意。地用意と詞の中ざわめき立つて女中達。櫛笥の剃刀持出でて。ッシ兩士へ渡せば。地こは〳〵ながら文聖寺。詞アヽ、そんなら此衣をはぎ。頭を奴にお剃りなさると。還俗でござります。どうぞそれは御堪忍。ホヽ、還俗がいやならば。兩人が手に掛けうか。アヽ、申し申し〳〵コレサコレ文聖寺。命代りぢやどうなとして貰ひましや。ヲヽよい合點。今玄蕃の言はるゝ通りいやといふと直に成佛。御前樣のお慈悲を以て。うぬらが好

きの佛國。天竺へ所がへ。イヤモウ天竺へ行かいでも。眞のこれが天竺浪人。手に覺えた能はなし。困つた物ぢやと ﾌｼ 呟く中。地玄蕃彌藤次手ん手に衣。剝取り引きすゑて剃刀手合せごつし〳〵。剃りかゝれば兩僧は首をすくめて。詞アイタ、ちつと待つて下さりませ。かう剃るとはあんまりむごい。コレ八乘寺。こなたも嘸いたかろ〳〵。申し〳〵どうも堪えられませぬ。アヽコレ〳〵文聖寺それは悟道のすわらぬからぢや。首代りの此月代。悟りの道を極めたら。痛いと思へばいたけれど。ハテいたらないと思へばやつぱり。アイタヽヽ地あいた〳〵を興にして。蝦夷は酒宴。遣手こなたには奴頭に剃り立つれば。撫廻し。合〳〵ナホス殘つた鬢にﾌｼ顏見合せ。詞ホンニあんまりの事でいたをかしいわいなう八乘寺。ヲヽサわれがおれか。おれがわれかで。どうも濟ぬ頭になつた。ハテ是からは申合せ何なとして渡世する。貴僧は是より文聖寺の一字を取り。地文七と名を改めよ。愚僧は又。八乘寺の八を取り。詞八藏と付いてこまそ。ハレ變つた事になつたナア文七殿。ホヽこりや目出度うなつたわい。此方もそんなら今から八藏殿。ムヽヘヽ〳〵〳〵と地やくたい坊。玄蕃彌藤次追つ立てて。ﾌｼ門外さして出でて行く。地折から表の廣間口取次の青侍罷り出で。詞大判事の子息清舟。召に應じて參上と。地呼ばはる聲に入來る久我之助清舟。器量骨柄武氣備はる。中に優美の長上下禮儀。ﾌｼ正しく座に着けば。地蝦夷大臣進み寄り。詞珍しき久我之助。使を立てしに早速の入來。尋ね度き事別儀でなし。帝愛憐をかけ給ふ采女の局は鎌足が娘。此頃內裏を脫出で。入水せしと聞きつるが其方は采女が付人。實否を聞きたく呼寄せたり。噂の通り違ひはないか。仰せの通り采女殿には。世を儚く思ひ取り。猿澤の池へ入水ありしが。我傳きの役目なれば。野邊の送り營み參らせ。未だ三日を過さずと。詳かに答ふれば。さこそ〳〵。親鎌足が蟄居を悲み。淺ましき采女が成行き。其方付人の落度となり。親大判事に勘當を受けたと聞く。さあらば主も親もなき身。それに何ぞや。嚴しく禮服を着飾つて我が目通りへ出でたるは。心得難き汝が心底。ハヽ御不審の段御尤も。親もなく主君もなく獨立ちの私。若輩ながら蝦夷公へ。奉公の儀願ひ上度く。君と敬ふ此禮服と。地心に探りの一思案。眞しやかに相述ぶれば。詞ホヽ扨は此蝦夷を賴み奉公の望みとや。若輩者の神妙々々。我も望む所なれど。其方が父大判事に汝が勘當赦させて。親子とも臣下となさん。コハ仰せとも存ぜ

ず。親大判事が氣質として。一旦申し出せし事覆らぬ鐵石心。勘當も赦さず。元より二君に仕へぬ所存。ヲヽ其口剛き大判事。蝦夷が幕下に附けて見せう。ホヽお手柄に如何樣とも。親清澄得心致さば。此上もなき仕合。所詮私一人の奉公が相叶はずは。とや角申して益なき事。地先づお暇と禮儀をなし。ッシ廣庭におり立つて。地靜に歩む向うの方。豫て言付け置きたりけん。玄蕃彌藤次立出でて。前後を圍み仁王立。ソレと蝦夷が下知に連れ。兩人一度に切付くるを。身を沈めば双方の双は合打。さしつたりと開いて又も横備へ。車輪の劍付込む鋒先。清舟心得左右の柄元しつかと握り。詞蝦夷公の仰せなるか。何故に尾籠の手向ひ。ホヽ不審は尤も。其方が武藝の試み。兩人に言付け置いたが。天晴々々。コハいかめしき御尋ね。若輩の私なれば腕だめしの覺えもなし。猶此上に手練を極め重ねて御覽に入れませうと。地双方を突放せば。跡へしさつて兩人が又も切込む双と双。庭の飛石エイウント。請ければ御殿の天井より。怪しく下る鐵網に。清舟きつと眼を配り。詞コリヤ再三のお試み眞劍のお相手が。お望みならば兎も角も。イヤモウ驚き入つたお手際。見屆けましたと。地双方の刀は鞘に飛石も。元へ直せば御殿の網。棟木遙にッシ隱れける。地久我之助さあらぬ體。詞蝦夷公試みの鋒先を。受け留めた今の飛石。地を放るゝと下る鐵網。元のごとく石を置けば網も隱れて其體なし。ハテむづかしい御要害と。地案める一言ぎつくりと。術の試み毛を吹いて。疵をくろめるしたり顏。詞大切の此要害。其方は身内同然見せて置くも幸ひと。地俄になつける詞の艶。詞ハヽ此清舟も武士の端。只今如きの御手配り決して他言は仕らぬ。御氣遣ひ地御無用と暇申して久我之助。左右に目配り悠々とッシ表を。さして立歸る。地跡に蝦夷は溜息の。ッシ一間の襖押明けて。入鹿大臣の妹橘姫。跡に續いてめどの方。舅に心奥の間は今日の酒宴にかけ合はぬ。本ッシ鉦の響を身にしみ〳〵。地御機嫌いかゞと兩手をつき。詞御酒宴の半ばながらあなた樣へ御願ひ。それ入鹿大臣には。秋の頃より一向に佛の道に入り給ひ。奥の亭へ引籠り一つの棺を地中に納め。丁度今日が百日目入相の鐘を限り定に入り給ふと聞く。地何に譬へん此身の悲しさ。何と便りがある物ぞ。少しは思ひやり給ひお諫めなされて下されと。スェ涙先立つ喞言。詞同じ歎きを橘姫。詞何卒再び兄上樣。遁世の思し立止まり給ふお願ひと。地一つ思ひを二人して。いふを打消す父大臣。詞ヤア聞きたくもない入鹿めが沙汰。

今此蝦夷が威勢につぎ。何不足なき榮花を捨て。佛法といふ天竺外道の術に歸依し。奥庭へ引籠り。晝夜わかたず稱名讀誦。此世にあつて益なき悼。土へなりと定へなりとも。入り次第にして置きめせ。また最前から鉦が鳴る。エ、忌はしい不幸者。嫁も娘も重ねて言ふまい。ハイいやまだ不吉な泣聲。此酒宴を妨ぐるか。イエ〳〵申し。何のマア御遊興を妨げませう。モウ何にも申しませぬ涙を零しは致しませぬ。地御赦されて下されと。袖に解け行くしをり雪思ひは。フシ胸に氷るらん。地橘姫引取つて。詞申し父様モウ兄上入鹿様の事申す者はござりませぬ。御機嫌を直されて。別殿で御酒宴を。ホホ娘よく言うた。これより居間を狩へ再宴を催さん。玄蕃彌藤次も奥へ來よと。地怒りの風も風の舵腰元どもが取り〳〵に。フシ一間へ伴ひ入りにけり。地橘姫心せき。詞父上のあのお氣質。何程お願ひ遊ばすともお聞入れはあるまい。これよりは此橘大内へ急ぎ參り。何卒兄上入鹿様。御入定を止まり給ひ再び昇殿ある様に。地幾橘のお局へお願ひ申す心ぞと。力付ければどの方。詞難面は入鹿様。今日を限りの入定と。生き別れの妾が身。同じ館にありながら。暇乞にお顔をと。願ふ事だになか〳〵に。地築山の門を鎖し。物いひかはす事さへも。泣いて暮してをりますと。むせぶ涙を友千鳥同じ翅に露時雨しのぐ フシ方なき思ひなり。地姫は涙を打拂ひ。めご様氣遣ひ遊ばすな。暮を限りの事なれば一刻も早う。自らは大内へ。それは一入御苦勞ながら。これはマア改まつた妾とても同じ事。ソレ腰元ども。大内へ上る用意せよ。地畏つて附々が。奥乘物と夕映の。日頃中よき娶小姑。互に力付け合うてオクリ禁裏を。へさして急ぎける。地跡見送つてめどの方。便りすくなき身の上を フシ諦め。兼ねて胸の内。地縦へ願ひが叶ふとも。心變ぜぬ夫の氣質。それと知りつゝ賴みしも。妹御の親切を破らぬ誠 スエテとやかくと。思ひ續けて庭におり。ヲヽキ木草の枯葉眺めても。猶いやましの無常心。夫の命もナホス今日限り。涙は胸にふりつもる。雪かき集めかき寄せて。氷る手先も後世の爲束ね。丸めて五輪の形。詞此世の名は入鹿大臣。地頓生菩提と手を合せ。心の囘向せぐりくる聲も。憚るしめ泣に哀れはかなき風情なり。地それに引きかへ奥の間は。フシ地下を寫しの三味線に。なまめく歌の聲冴えて。歌花は散つても春は咲く。消えて歸らぬ。其雪にさへ劣る。憂身は消えもせで。合詞あんまりといはうか心ないといはうか。現在子といひ嫁といひ。けふを限りの命ぞと。悲しむ事

を聞捨に。歌捨てた。浮世に。斯うして居ればの。仇名たつ田の流れの錦。合詞エ、心ない此中で雪見の酒宴どころかい。アノ鉦の打納めが入鹿様の御臨終。夫を先立て何樂み。地我も一所に此雪と。共に未來の道連と。ッシ上着を脱げば墨染の。けさより積る廣庭の。雪に座をしめッシ合掌し。地此儘髣に埋もれて。死なんと誓ふ。貞心は天に通じて降りしきる。膝も袂も白妙に色香盛りの黒髪も。八十のッシ姥と疑はる。地恩愛血筋に屈託せぬ。蝦夷大臣一間を出で。詞嫁めどの方。まだそこに泣いてゐるか。ハテ扨々どくにも立たぬ。馬鹿者の入鹿が事を苦に病み。物好な雪なぶり。もう打ちやつて髣へ來て。火に當りや。アノ胴慾なおつしやり事。夫は定に入り給ふに。そもやまあ妻の身で。褥の上に居られませうか。地雪に凍えて死ぬるのが。せめてもの夫婦の誠。詞ハテ貞節な心底。其實心を聞いてお身に問ひたい事がある悴入鹿が入定は。佛法信仰ばかりであるまい。様子無うては叶はぬ筈。親子に增る夫婦の中。夫の心知つて居よう。イヤサ何ぞ密に聞いた事があらうがな。サ其仔細が聞きたい。我が強うは言ふものゝ。實は不便な子の命。様子によつて入定を止める。思案あるまいともいはれぬ。地どうぢや〳〵と脇道から。猫撫聲もッシ氣味悪き。詞イ、エ親御様さへ御存じない事。何の私が知つて居ませう。さりながら脇目から存じますは。夫入鹿様のお覺悟はお前様のお心が知れぬ故かと存じます。ハ、〳〵〳〵蝦夷が心は今降る白雪。一目に見えてある潔白。サア其雪に埋れては。上から見えぬ塵芥。心の底がどうも解けぬ。入鹿が性根聞きたい〳〵。イヤ申し常に夫が申さるゝは内大臣鎌足と父蝦夷は。國に二つの柱同然。一つ缺けても我が君のお爲にならずと物語。其大切の鎌足様を追退けなされたには。深い様子のありさうな事。ハテ知れた事。此蝦夷は忠臣。佞人の鎌足をぼつ下したは天下の爲。我が君のお爲ぢやわい。イエ〳〵〳〵。鎌足様に罪ない事は。世上の人が能う知つてをります。地威勢を妬み猜んでの。さかしら事と世の人の譏は耳に入鹿様。夫が積つてあのお覺悟。詞一人の榮華を極めんとて。地譏も顧み給はぬ。蝦夷様のお心さへ改めて下されなば。入定も止まり給はん。夫の生死は父御様のお心次第。嫁子不便と思召し。お聞入れ下さりませ。詞夫婦が命は厭はねど。お心が直らねば。お前も遁れぬ危い命。地君の御恩を受けながら。十善の位を奪ふ。御謀反の思し立でござりませうがな。天道様の御罰にて。お身に報ふが悲しさに妾が御意見。悪心を止まつ

てたべ蝦夷様と。舅を思ひ夫思ひ。合す兩手にはら〳〵とフシ涙深山の瀧なせり。始終とつくと蝦夷大臣。詞モウよい。すりや我が大望蹉らず入鹿に聞えたよな。さうあらうと思うた。氣遣ひすな其方達が望の通りにしてくれうが。まだ尋ぬる事がある。めどの方。駒下駄直せと地刀提げ庭の面。若しや得心あり磯海底は白洲に危ぶむ目遣ひ。詞嫌近うよりや。ハイ〳〵と地立寄る目先へ氷の刄。ハッと飛退き。詞舅御様そんならどうでも。思ひ止まるお心はござりませぬな。馬鹿靈すな女め。天下を取らば肉身の入鹿。讓りくれんと思ひの外。道立てする悴にはもう構はぬ。思ひ立つた大望。一度萬乘の位に昇る此蝦夷。エ、腑甲斐なき性根と知らず。入鹿に渡した連判狀。汝が有所知つて居ようイエ〳〵御謀反の譯は聞いたれど。連判とやらは。イヤ吐すまい。一大事を聞いた女。殊に安倍の行主が娘。所詮生けて置かれぬ奴。いうても殺す。いはいでも殺す。其一卷玆へ出せば。苦痛せずに一思ひ。諍ふとなぶり殺し。サア〳〵何と付け廻す。地遁れがたなに肩先すつぱり。突込む蝦夷が尖き鋒先。手負は大地にこけながら。蹴上ぐる白砂雪烟。手に渡さじと懷中の一卷火鉢に燃立つ炎。嵐に連れて烈々と。折しも聞える。フシ鐘太鼓。詞ヤアいぶかしき攻鼓。連判狀を燒捨てしは。我が大望を挫いたる。不孝の入鹿夫婦の奴輩。大事を敵に洩せしな。地憎くい女め思ひ知れと。足下に踏付け肝先を。刳りくる〳〵流るゝ血汐。雪を染めなす皆紅。眼血ばしる表の方。勅使なりと呼ばはる聲。詞ム、貝鐘の音に引替へ。勅使の案内は我が胸中。窺ひさぐる謀身體今日の一擧に極まる。地裝束せんとやらは。イヤ帳臺。〈深く入りにけり。地程もあらせず細殿傳ひ。入來る勅使は安倍中納言行主。副使の武官大判事清澄。フシ威儀を正して座に着けば。地出向ふ主も衣服改め。上座に請じ頭をさげ。詞お勅使として行主殿。雪中の路次別して御苦勞に存ずると地挨拶終れば膝を寄せ。詞今日の勅使尋常の沙汰にあらず。貴卿は父馬子より代々の功。忠勤あつく君の寵にほこりたるや。内々逆心の徒を語らひ。帝位をかすめん企てありと叡聞に達せし故。諸國の勤番武官の面々。此館を圍む所。此行主は一家の好館。今老臣の蝦夷大臣。麁忽の計らひなすべからずと。進み出でて使を乞受け。取敢ず馳向ふ。包まず言上申されよと。地聞いて蝦夷は居丈高。詞ハ、〳〵〳〵。何事かと存じたれば。この老人に逆心ありとや。最前より遠く聞ゆる鐘太鼓。スハ禁廷に大事ありと。思ふ折から我が家へ勅使。俟人

讒者の詞を用ひ。叡慮暗き帝の疑ひ。勅答致すも馬鹿々々しいと。地詞鋭にフシ言放せば。地大判事進み寄り。詞ヤア血迷ひ給ふか蝦夷公。其身の白狀勸め給ふ。行主公は一家の證。叡聞に達する大事。再三吟味あつての事。いか程に誹はれても。拔きさしならぬ證據ありと。懷中より取出し。投げやる一卷おつ取つて。見れば覺えの連判狀。序文の手跡誓書の名印。さしもの蝦夷も證跡に。ハツトばかり驚く面色。ナント見られしか蝦夷殿。我が聟の入鹿大臣。此一卷を帝へ捧げ諫めても承引なき父が逆心。子として是を露はす事不孝の罪莫大なれども。君恩に代へる道なければ叡聞に達するなり。我は祖父馬子が意をつぎ。佛法に歸依しぬれば。遁世の外なしと引籠りめされども。我が娘めどの方。謀に命を捨て最前燒き捨てし贋物の連判狀は。試に逆心有るかなきか。知らせの狼烟。貫殿の口より謀反の次第。最前既に白狀の上。最早陳ずる詞あらじ。ナント〳〵地ときめ付けられ。一句一答詞なく。只默然たるフシばかりなり。地大判事さし心得。三方に腹切刀。蝦夷が前に差置けば。行主立寄り傍なる。雪人形手に取上げ。詞コレ見られよ。愚かなる譬なれど。此束帶の雪人形。其形をなすといへども。火に當れば忽ち水。其人にあらざる逆心。消果つるは天の御罰。せめて最期は此雪の如く。潔く生害あれと。地諫めの言葉を耳にも入れず。無念に固まる雪人形。傍なる火鉢の炎の上。掴み碎けば水烟。肌押しくつろげ腹切刀。腹に突立て怒りの眼中。詞エエ無念口惜しや。仕込に仕込みし我が大望。現在の悴入鹿が手より洩れたるは。我が運命の盡きる所。さりながら此蝦夷世を去らば。見よ〳〵忽ち天地は常闇。不具者の帝を始め。月卿雲客思ひ知れと。地きり〳〵と引廻す。太刀取り後に大判事。はつしと落す首諸共。矢一つ來つて行主の胸板射拔きフシあへなき最期。地こはそもいかにと悔り仰天。途方にくれて立惑へば。詞ヤア淸澄必ず驚く事なかれと。地聲かけて一間の襖。二人の武士に引拂はせ。築山の岩間陰。しづ〳〵出づる入鹿大臣。髮はおどろに麻衣。さもすさまじきフシ有髮の骨形。地大判事ぎよつとして。詞ヤア入定ありし入鹿公。不思議の對面いぶかしと立寄れば。ホヽ實にも〳〵さもあらん。不審の一條語つて聞かせん。父蝦夷年を重ね叛逆の企てあれど。其器小さくして。なか〳〵大望なりがたし。爰を以て此入鹿。表には仁を飾り。父の惡事をうとめる容。地佛法歸依と引籠り。帝を初め數多の公卿。父蝦夷に心を付け。油斷の間を行法の築山よ

り禁廷の。寶藏へ隠れ道。土を掘り。石を穿ち。妙計違はず忍び入り。詞疾より評定ありしに違はず。神璽御鏡失せ給へど。叢雲の劍は。易々と手に入つたり。父が命妻が命。芥の如く見捨てしは。此時を待つ謀。あら。心地よや潔しと。地御殿に鬱くうなり聲。地扨はと驚く大判事。玄蕃彌藤次弓と矢番ひ取圍めば。大臣重ねて。詞馬鹿者の舅行主。血祭に手にかけた。其方は我が所存あれば。味方に付けば其通り。否といはゞ行主同然。サア勝手次第に返事せよと。地大惡不道の入鹿が行跡。爰ぞ大事と大判事。心を定め低頭平身。詞時を得給ふ大臣に。いかで違背申すべし。我が君と仰ぎ奉ると。地申上ぐればつこと笑ひ。詞ホ、潔し潔し。三德備はる此入鹿。天地の間に挾まるもの。誰か敵對ふ謂なし。今日より我こそは萬乘の主たり。アラ忌はしの墨衣。地いでや衣服を改めんとオクリ呼ばはる。聲に數多の官女。手ん手に着せる。綾錦。地立直つて大音上げ。詞清澄は皇居の案内。玄蕃彌藤次殿せよ。是より禁裏へ馳向ひ帝を始め月卿雲客。殘る寶の所在を責め問ひ。摑みひしいで心の儘。地中門のほとりへ丸が車を進め。官人ども來れやつと。聲に隨ひ數多の武官フシ列を正して先備。地玄蕃足駄を奉ればひらりとおり立つ勇みの姿。心は雲井に高足駄。門出の音樂璉然と。またも降り來る雪の空。心得供奉のみさぶらひ。柄長の御傘差しかくれば。六つの花瓣ひらひら雪。威風邊を拂ふ雪。合深き思慮ある大判事。前後のそなへ。殿かに。御車。はつと時めきて内裏をさして出でて行く

第二

地山又山も都路は心に連れて奥深き。名も猿澤の池にさへ。波立つ。フシ世こそ憂かりける。地此方の道よりたどり來る山働きの狩人ども。打連立ちて立留り。詞コレ九右衛門　こちらが仲間の芝六が。此間から夜狩して好い代物付け出した。それでおいらを助けの雇ひ。葛葛山から山城境へ入込んで居るとの事。今夜はぐつと働いてやらにやなるまい。ヲ、サもう明けても暮れてもおいらが相手は猪武者。五六疋射とめてやつてぐつと褒美を貰はう。サア〳〵地行かうと世渡りに。追はる〻獵師山も見ず。フシ足を早めて急ぎ行く。地世の憂さは尊き卑きも亡魂の雲隱れせしと思ひ人。フシ采女の局の跡慕ひ。地勿體なくも萬乘の。長地帝の軟き淺からず御所を忍びの夜の鶴。それとは更に人知れず。舍人にも武官にも。只官女のみ道案内。池の邊へ御車の。軋るさへものの淋し。殊に盲の君なれば哀れも勝

る御姿。宣ふ聲も打ちしをれ。詞此邊が猿澤の池なるかと。地仰せに官女進み寄り。此間久我之助清舟奏聞申せし通り。采女様入水の跡。猿澤の池にて候と。地申上ぐれば今更に。スエテ御落涙をせきあへで。思ひ出せばッシ去年の秋。民の營み憐みて。詞わが衣手は露に濡れつゝと丸が詠ぜし傍らに筆を取りし其采女。早や此世には亡き人とや。誠に我が衣手は。涙に濡るゝはしならん。地せめて今宵の手向ぞと。詞わぎもこが寢くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しきと地詠じ捨てッシ御涙こそ限りなし。地ッシかゝる折しも。此方より。尾羽打枯らせし浪人姿。御車近く手をつかへ。詞女中方へお頼み申す。帝様の御車と遙に見受け申した故。押して御願ひ申す事あり。憚りながら奏聞の御取次頼み入ると。地いふ聲それと聞し召し。詞ナニ珍らしや淡海なるかと。地仰せに猶も頭をさげ。地私過ぎつる節會の時。神例の式を過ち。とくよりも勅勘蒙り。先非を悔いて内裏を遠ざけ。市中に潜まり在る所。蘇我の蝦夷我意を振ひ。父鎌足も蟄居致させ。猶玉體も安からずと聞くより前後顧みず。何卒玉體守護の爲。勅勘の御赦免を。願ひ上げ奉ると。地土にッシ平伏し。詫びにげる。地君叡感斜ならず。朕が不德のなす所かと。左右に奸佞の人絶えず。地蝦夷帝位の望み有つて叛逆の企てある事。嫡子入鹿大臣が忠心に事顯はれ。安倍の行主を使に立て。詞今日事を糺すに及ぶ。未だ歸り來らねど。蝦夷が自殺は眼前。地鎌足内裏を避けし事も悔むに甲斐なき有様ぞ。詞今より元の淡海。再び忠勤勵むべしと。地さも有難き免許の勅諚。淡海初め付々も。皆悦びを。ッシ奏する所へ。地禁廷の勤番使御車の御跡慕ひ。息つぎ敢ず馳參じ。詞主上是に渡御なる事漸う相知れ御注進。今日蘇我の蝦夷館へ行主公勅使として大判事を召連れられ。彼等叛逆吟味の所速かに白狀あつて蝦夷は其座に切腹あり。清澄是を介錯す。然る所行法に取籠つたる入鹿大臣。實藏へ忍び入り叢雲の御劍を奪取り。眞は親蝦夷に越え王位を望む大悪人。行主も忽ち手にかけ禁廷へ馳込んだり。是に支へる公卿の面々。或は蹴殺し切倒し上を下へと逃げさまよひ。さしも廣き禁裏の内人種も盡きんばかり。地猶も追追注進と。ッシ呼ばはり捨てて立歸る。地皆々はつと驚きに。わきて帝の御歎き。詞如何なる天の咎ぞや。思ひ計らぬ入鹿が悪心。われ四海の主として。臥所さへ地なき身となるは。淺ましき境界と スエカヽリ歎かせ。ッシ給ふを淡海は。御心弱き御仰せと。勇める中に思慮を廻らし。竊に官女の耳に口申し合せて。ッシ車に向ひ。

詞思ひがけなき只今の注進。是より馳付け遠見を致し。安否を言上申さんと。地出行く振の偽りも。盲の君の御心地を休むる術此方なる。ツシ木蔭に暫し。イむ中。取り〳〵ツシいさめ奉る。地暫くあつて淡海は。急ぎ歸りし足音して御車近く息をつぎ。詞只今遠見致せし所。諸國の軍勢蟻のごとく禁廷へ馳參り。さしもに猛き入鹿大臣直ちに退け候へば。忽ち内裏は穏かなり。地早や入御ならせ候へと誠しやかに相述ぶれば。主上は安堵の御思ひ御悦びはツシ限りなし。地淡海は官女を制し。詞急いで還御と先に立ち。地轅を取りて舍人役。押して行方はいづことも空定めなき空勇み。オクリ露踏み。分けて三重へ辿り行く。地山手の道より親子連爰に名高き狩人芝六。弓矢手挟みいつきせき。ツシ人絶の木蔭に立止まり。聲をひそめ。詞コリヤ三作此間から夜の狩。是は渡世の表向雇ひの列卒ども山手谷々方々とかけ廻す。此物音の騒に紛れ兼て其方に言付けた。彼の爪黒といふ牝鹿は千疋が黒。詞アノ猪狩の貝鉦でぽつ立てたら驚いて。向うの山を越すは必定。地其方は是から谷へ廻り列卒に貝鉦打鳴らさせ。件中に一疋。地それ取りたいばつかりで此様に骨を折る。其念力が通つたやら。ハアツ葛籠山の向うの谷間。見付け得た其爪の鹿を追出せ〳〵。詞ヲヽ心得ました。シタガこれ父様。追出すは易い事ぢやが。鹿を射るは所の法度。お前の身に難儀が

出來ては。地母様やわしが身は。如何しませうと稚氣に。後を案じる賢しさは。孝行見えてッシ不便なり。詞ハテ扨氣の弱い事をいふそれ知られて埒る物か。もし知られたらば百年め。命がけな事するのも此身の榮耀を望むではない。所詮此狩人商賣人間のする業ぢやない。せめて汝等には狩人がさせとみなく。侍にせうばかりぢや。爺が身に氣遣ひはない程に。サア〳〵早う谷陰へ地おれは別れて麓の方。合點かぬかるな心得たと。牒し合せて親と子が。道は二筋ひき別れ山路をさしてぞ。三重へ急ぎ行く。谷山峯に。地輝かす數の松明貝鉦の響につるゝ列卒の聲松の嵐も驚き。スハ好き時分と芝六は弓矢つがうて麓の方木蔭に隱れッシ待つ所へ。地猪を狩出す山路の騷ぎともに駈き駈來る鹿。件の爪黑得たりやつと。切つて放す矢あやまたず鹿の咽吭貫きてッシ其儘其處へ倒れ伏す。地三作はかけ着けて。詞爺様射とめさつしやつたか。シイ。聲が高い。ヲ、首尾能う仕留めた。エ、爺様地如何やら怖うなりましたと。スエ身を顫はして涙聲。詞ハテくど〳〵と氣遣すな。人の見ぬ中歸れば濟むと。地邊見廻し心を配り。鹿引つかたげ親子連宿りをさしてぞ三重へ立歸る。地三笠が本の雨宿り烈しき嵐吹き越して君が御遊の御車は。フシ此荒家にとゞまりし。地獵師芝六が侘住居。妻のお雉もまめやかに。仕へ參らす大君の供御のしかけの米粒をフシオクリ選むも。女中の手すさみに。紺の前垂緋の袴。打交りても女子同士。つい馴安きならひなり。詞ホンにいか様上々様といふものは。此様に一粒々々米を選り。是はちつと色が黑い。是は角が缺けたのと皆選り出して。上げます米は二粒か三粒。神様より大切な十善の主様。斯うなうてはならぬ筈。是を思へば勿體ない。王様に上げる供御を踏む。碓踏めば足が腫うと。地いへば女中が何のいな。詞上様でも肝心の時は。やつぱりうすがお好きでな。勿體ないと此方から遠慮すれば結跏して。下馬緩怠とお呵りなさると。地笑ひ綻ぶ。障子の中。しほたれ公家のしよげつぱさ。フシしよんぼり立出で。ナウ〳〵上蔦達。夜も早や初更に及びしに。夕御膳の供御何として遲なはる。膳番は何處に居る怠り。フシなりと呵らるゝ。詞ホ、ホ、ホ、お公家様方とした事が。やつぱり禁裏の格式で。何のマア獵師の內にそんな仰山な膳番とやらがあるものか。彼方には御存じない。貧乏世帶といふものは。何もかもたつた一人。むつくりと起きると釜の前。庭の掃除は仕丁の役。お淸所の飯焚役。鑰の出し入れ內侍役。地とんと仕舞しまうて寐る所がお后様。詞百人

前する事なら手の廻らぬは御推量遊ばせ。地此又此方の王様は。遅い事ぢやと夕闇に。山を了うて親子連息せき背に大風呂敷寒風に汗たら〳〵ッシ下りの我が家の門。詞嗚今戻つたと内に入り。コレハ〳〵大切なお方々。なぜ端近う出しますぞ。お前方もお前方。在所の濯物見るやうな。その大層なお姿で地によろ〳〵と出て御座つては。何ぼう山家の一つ家でも誰が見まいものぢやない。詞お局方も年中巫子殿の様に。其長い物を此狭い内で引きずつたら。裾踏んで轉さつしやろ。それでコレ。奈良の町でよい流れ買うて來た。サア〳〵是をお召替へと地風呂敷解いて取出し。着せる褞袍のゆき丈も。哀れ昨日の。長袖を在所小紋のかます袖。似せ兜羅綿の平田帶根から似合はぬ。ッシ御裝束矢背のけらを見る様な。名もかへて右大辨助様。お前は大納言兵衛様。地此方が髪も町風に島田とやらに結直し。詞おあちやおいちやにお梅が香。在所の嗅の風俗は。憚りながら私が傳授。アヽこりや嗅。上様の御膳はまだか。何れも様も嘸御空腹にござりませう。イヤ〳〵。心遣ひ無用々々。帝さへ御安泰なれば。地臣等が事は苦しからずと。殿上人もスエ世に連れて。食客の身のッシ氣の毒顔。詞イエ〳〵何ぼ尋常におつしやても。内裏様も喰はにや立たぬ。思ひなしか昨日から。めつきりとお顔が細つた。嗅ママアちやつと握り飯なとして上げいと。地亭主は如才内證のしがをッシくろめて入る所へ。地腰に帳面ぶら〳〵爰へ郡山の搗米屋。詞内方にどんすか。ヲヽ新右衛門様。能うお出でたれど折悪う今日は。ヲツトお内儀。又留守といふのか。晦日に來るといつでも朝から内に居ぬ故。今日は留守を云はさぬ様に。氣をかへて朔日に仕かけた。拂はぬ癖に。節季に書出し何故おこさぬと。小みづがいやさにコレ。持つて來た此書付。去年の尻殘りが六十六匁三分五厘。何時まで釣り付けるのぢや。踏付くられては居ぬ男ぢや。サアサア〳〵今拂や今受取らうと。地邊響かす聲高く。大納言押止め。詞ヤヨ下々の者いとはしたなき爭ひかな。しづまれよやとありければ。ヤ貴様何ぢや。今手の筋見る人か。コレ茶一つ汲んで下あれ。アア減相なあなた方は大事のお客何ぢや客ぢや。ハテ米代も拂はずにあんなけない人取込んで。また米屋を騙るのぢやの。コレ喰ひ潰し達おれが喚くが無理かこの書出し。ソレ見やしやれ。ム、此切紙は色紙の形拠は歌かと地つく〳〵眺め。詞ハテ珍らしき五つ文字。書出し一つ米代六十六。去年の霜月殘る銀。是は戀歌とも思はれず。イヤ戀も戀借錢乞ぢや。何

にもせよ下々には優しくも三十一字をつらねしな。ェ、三十や四十の端た銭ぢやないわいの。貴様もかゝり人ならよう聞かしやれ。爰の芝六は盗人ぢやかういふが無念ならサア金拂へ。がかうは言ふものゝコレ嗚業。こなさんの心次第で。アヽ結構な料簡があるにナ。アノ薄い芝六に。百目近う仕送つたは。しやりから付け入つて貴様の舎利塔。疾かう念かけて居るに。しやりとては胴慾な。留守が定ならコレどうぞと ッシひつたりと抱付けば。詞アヽこれ何さしやんす。主が内に居やしやすぞえ。ヤア〳〵。内に居るなら銀受取らうわい。イヽェ留守ぢやわいな。留守ならちよつとと又取付く。地首筋摑んで板間にどつさり。悶りしながら負けぬ顔。詞ヤア芝六。夫程内に居ながらよう留守つかふな。サア米代受取らうかい。イヤ米代は渡してある。ソリヤ何時渡した。ヲヽ密夫の代三百目の内で。六十六匁引いて。跡が二百三十四匁。こつちへ今請取らう。ヤア夫は。サア今渡せ。サア〳〵〳〵と詰めかけられ。地きつちり詰つた入口ぴつしやり。門からしめて留守ぢや。詞密夫代も米代も。逢ひさへせねば取りやりなし。留守は五分々々。算用濟んだと。地お留守になつた腰の骨。ッシちが〳〵引きずり逃げ歸る。地姿は地下に落ちながら心の官位右近兵衛の。中將淡海公する〳〵と立出で。詞兼秋卿政常卿。君にも益々叡慮めでたく御渡り。是といふも芝六夫婦が深切。虎の口の御難を遁れ。此家に匿ひ奉れども。計らざる入鹿が亂。帝の御耳に達しては。彌御惱も重らんと。何事も包み隠し。只太平の容にもてなし。御目盲させ給ふを幸ひ。此荒屋をやはり禁裏の御殿の中と。僞りすかし參らする我々が氣苦勞。此上ながら御悟りなき樣にと。地詞半の破れ疊。出御なりと警蹕の。地聲諸共に押明くる。ギン明障子の御格子に。本ッシ御悼はしや天皇は。此賤が家とは夢にだに白平絹の緋の袴。褥に玉座なりければ。各シイと公卿達。ッシ威儀を。正して拜謁ある。地配膳の典侍阿茶の局。四方の御盤。平戸燒の茶碗。土器 ッシ其儘に。地下がる御膳を淡海押しとめ。詞朝餉晝の御膳。少しばかり召上られ。今夕の供御はお手も付かず。此儘下げよと勅諚か。地扨はお料理が御機嫌に叶はぬか。ェ、不調法な。詞御膳番の大隅大炊頭。急度申し付けんと。地立たんとするをヤヨ淡海。さな心痛めそよ。詞膳番の者の罪ならず。地兩眼くらき病の上采女が別れの歎きに沈み。思へば詮なき心の迷ひ。不德の君と蔑しまんッシ恥かしさよ。地爰は常寧殿よな。詞それに詰めしは誰々ぞ。ハア大納

言兼秋。右大辨政常。其外參議。中將。少將。百官百司殘らず參內仕る。ヱヽ御目だに明らかならば。遠方の御幸はならずとも。此內裏の中にても見所は樣々。其障子の繪絹には桐に鳳凰。見事な彩色。上段の繪は。竹林の七賢。又淸涼殿の廊下より。奧の間の四季。杉戸には蘆に鷺。雪に梅。種々色々の名畫名筆。每日見ても飽かぬ御殿。それよ初春にもならざるに。梅壺の梅今を盛り。君の御目も開かるべき 地瑞相にて候と。誠。ッシやかに奏聞あれば。地實にさこそ。十善の位には卽きながら。此九重の內だにも見る事叶はぬ常闇の。御裳川の流れを穢す我が誤りのなす所。詞誠に此月は內侍所の御神樂。兼てしゆらいもあるべし。病平癒の祈りなれば。樂人共を召出し。壽の管絃を始めよ。地早やとく〳〵と仰せに悦り。ハツ〳〵。とばかり俄に管絃の才覺も出でて。ハズミ返らぬ綸言の。地冷汗ながら。詞ハア〳〵是はよき思召し。樂は何がよからうぞ。還城樂か。武德樂か。樂人只今追付けこれへ。ヱヽ何として遲參致すと。地立端のしほに芝六が。手を引いて門に出で。詞扨迷惑な勅諚。俄に管絃のお望み。縱へ出來るにしてから。笛太鼓で騷立てば。忽ち人に御在家を知らるゝ難儀。何と智惠はあるまいか。智惠といふて私らがてこにおへぬ樂とやら。舞とやら。一體お前がこんな內で太平樂仰あるからぢや。ハア。ヲヽ何と是はどうあらう。私暫く廣瀨に居た故。べれ〳〵萬歲を覺えて居ます。坊主めに舞はして私が小鼓。管絃の代りにはなるまいか。素袍烏帽子がなけれど。そこらはかぐれ樣の一德。常の形でも大事ない〳〵。ヲヽそれ究竟と御前に出で。詞樂人延引仕る中。廣瀨村の萬歲瀧口へ參り候。梅の早咲きと申し。春に先立ち參るも吉左右。庭上にて千秋萬歲相勤めさせ候はんソレ御免なるぞ始めませいと。地仰もあいに愛らしく時の幸ひ才若の扇開いて。萬歲萬歲と有難かりける我が君の。御惱しづまり御目も開き給ひけるは。誠に目出たう候ひける。昔の京は難波の京。中の京と申すは志賀辛崎の松の色。變りし物は我々が身の有樣。君は。變らせ給ふなと。千年の齡奉る。忠臣の柱は月卿雲客。日本の柱は日天子。三本の柱は左近右近の花橘。四本の柱は紫宸殿。五本の柱は五畿內安全。シバカキ八重九重の內迄も治り。靡く君が代の。ウタヒ千代に八千代を。コハリ細石のナホス地祝ひ壽き申すにぞ甚だ。ッシ叡感おはしまし。詞いしくも祝しつるものかな。誰かある祿取らせよ。地管絃糸竹も祝儀は同じ。今日の舞樂も事終れば。詞百官百司も退出あれ。朕も夜の御殿に

入らん。地思へば我は斯くの如し。錦繡羅綾の内に坐し。民の難苦を露しらず。徳なうして榮華に耽る。神の照覽勿體なやと。御身のことは知り給はず民を。憐むフシカ、リ御詞。各顔を見合せて。額に涙の天が下。暫し入御なし奉る。地芝六跡にさし寄つて。詞仰付けられた彼の爪黒の牝鹿。近邊の山々尋ねても扨少い物。是迄ひに見當らず。漸う昨日見付け出し。念なう射とめ。乳の下の血汐を絞り壺に認め置きました。ヲヽ、大儀々々。正に天下の用に立てる。得難き鹿の手に入る事。偏におことが忠義の働き。父内大臣鎌足疾より入鹿が亂を察し。罪なくして身退き。興福寺の後なる山上に取籠り。天皇御惱祈の祓百日の行ひ。則ち今日が滿願の終り。帝此家にまします事。先達て知らせたれば。明曉六つの鐘を限りに。密に是へ來らるべし。地其時こそ其方の勘氣も赦免。改めて元の家來詞玄上太郎利綱。ハアコハ有難し忝し。この年月の念願成就。浮木の龜とも優曇華とも此上ながら鎌足公へお執成し。仰ぎ奉る。地必ず氣遣ひ致すなと。主從水魚の中臣氏。土に生ひても穢れなきオクリ藁屋の。フシ〈御殿へ入りにけり。地様子立聞く女房の。嬉しい中の心懸り。草臥さんしよと立寄りて。詞イヤアノこちの人。わしやお前に問ひたい事。今朝の噂に。マア聞かしやんせ。きつい法度を知りながら。春日の牝鹿を射殺した者があるとて。嚴しい吟味がござんすげな。よもやとは思へど。萬一鹿相でお前やなど。そんな覺えはないかいなと。地うら問ひかけるも夫思ふしかも牝鹿は覺えのきつくり。詞ハハヽヽ。ハテ譯もない。奈良の邊は赤子でも知つて居る鹿の法度。石子詰にあふ事を知りつゝ。殺す白痴があるものか。したが鹿といふは質置く事。一體しがないおれなればぶち殺すは常住の事と。地言紛らしてもどこやらが。鹿子まだらの雪見酒。氣が樂山で一杯せう。嗅烟つきやと女夫中。醉うた顔でも濟みやらぬ。癖を押へて入りにけり。地村の歩人が表から。詞コレ〳〵興福寺の塔頭から鹿殺しの科人。獵師中間に極まつた。友吟味して訴人したら。御褒美を下さるとお觸が廻つた。庄屋殿まで早やござれと。地言捨て歸る高聲は。小耳にはつと三作が。若し狩樣の身の上に。詮議かゝらばどうせうと。稚心のやさしくも眞實案じ侘住の手習。文庫破れ双紙。筆くひしめし何やらん。七ついろはの。清書文章。搔捜しやの腕白弟。詞コレ兄樣。さつきの箱下されやくれぬとコリヤ。かうちやと引つたくる。地筆のしんみは憎からず。詞ヲヽ夫もやらうが。コレ杉松。兄が頼む事聞いてたも

るか。此狀を持つての。大儀ながら興福寺の門を敲いて。寺中へ差上げますというて渡して來てたも。ム、そしたら何ぞ賃下さるかやるとも〳〵。賃には春日野の火打燒買うてやろ。又嘘欺すのぢやないかや。イヤ〳〵眞まぢや。そんなら合點ぢや。往て來うと。地すかさるゝのもすかすのも。年より賢き杉松が。狀懐にちよか〳〵走り。見送る兄が書き殘す。スエテ筆の命毛器用なが。フシ仇と白地の神ならぬ。地折もこそあれひそ〳〵と。表に窺ふ捕手の侍。ソレとかけ聲かけ入つて駈行く奥より駈出る芝六。詞待つた〳〵。こりや人の内へ理不盡に狼藉千萬。ム、聞えたお前方は鹿奉行のお手下ぢやな。イヽヤ此家の内に吟味あつて。入鹿大王より詮議の役人。汝が内に匿ひ置いた者あるべし。眞直に白狀と。地かさにかゝれど惚ともせず。詞ハア何の事かと思うたら。私ぢやとて貧乏な狩人でも。相應のかくまひは致さいでは。それを御吟味とは。お役人に似合ひませぬ。仰山なお侍樣。ヤア啞けな。かくまひ置いたはお尋ねの天皇。竝びに鎌足が悴淡海。是非詞へば此通りと。地傍に在合ふ三作を取つて引き寄せ差付くる。双は胸に差當る。人質取られて。詞ハア〳〵〳〵。サア〳〵何とと詰めかけられ。先づ〳〵お待ち下されい。如何にも申譯致しませう。が爰ではどうも申されず。大庄屋の方迄參り。委細白狀。致しませう。ム、。然らば早く。サア歩め。ハツ〳〵。コリヤ三作わりや戸をしめて。嚊に氣を付けいと言へ。いざ。お役人と地打連れて。毒蛇の口の一思案フシ心は。跡に出でて行く。地一間に樣子立聞く淡海。局々と呼出し。詞芝六が心底。忠臣無二と思ひしが。子に絆されて大事を誤る今の行跡。拷問に及ばゝ慥に白狀。どうも天皇。長く爰には置きまされず。今宵の中に山越に。お伴して立退かん。地皆々密に用意々々。我は猶も芝六が。歸りを待つて一詮議と。鍔元くつろげ立上る。詞マア〳〵〳〵お待ちなされて下さりませと。地お雉は駈出で手をつかへ。詞お疑もさる事なれど。あれ程に迄思ひつめ。御勘氣を赦されうと。心を碎く夫芝六。中々白狀致す樣な。未練な心でない事は。私が存じて居ります。一先づ歸りをお待ちなされ。其上胡亂な事があれば。一天の君にはかへられぬ。夫とは言はせず。私から切りかけます。其時にこそ心底の。明さ暗さは今宵一夜。憚りながら私に。お預けなされて下さりませ。ム、實に。一命を差出し。賴まるゝ程の玄上太郎。とはいひながら草も木も。地我が大君の國なれど。詞今は草木にも心置かるゝ此時節。すはといは

ば容赦ならず。御前へ參って返事を待つと心。地ゆるさぬ關の戸は。破れ障子のつゞくりも。反古にせじと間に合ひ紙。書きあつめたる胸の中。母の心を三作もッシ共に。案ずる折からに。地興福寺の衆徒鹿役人。先に立つたる杉松が。しるしの門口差覗き。詞ム、科人はあの悴よな。地捕つたといふや否應言はさず三作を。取つて引立て用意の早縄。お雉鷙き。詞コリヤ何事。大事の子をどうするのぢや。ヲ、鹿は春日のつかはしめ。殺した者は古へより。大垣の刑に行ふ大法。エ、イ。其御詮議は聞えたが。狩人も多い中。外の吟味はなされいで。此子一人が知つた樣に。あんまりな當推。但し證據でもござりますか。ハテ證據なくして名を指さうか。其悴が所爲といふ事。慥な訴人あつて明白。ム、訴人したは何所の奴ぢや。覺えもない無實をいふやつ。切刻んでも飽足らぬ其訴人め。サア爰へ出してお見せなされ。ヲ、訴人は此悴。現在の弟が注進。よもや相違はあるまいと。地聞いて惱り。詞コレ〳〵ぼん。我が身はさつきから何所へ往て居やつた。アイ。わしや此狀持つて。あの坊樣の內へ往て。連立つて戻つたと。詞いふに怪しと引取つて。讀む度々に胸どき〳〵。詞何ぢや。お尋の鹿を殺し候者は。私兄の三作に違ひござなく候。そんなら此書付を。ア、わしが持て往た。サ、兄樣賃下され。地饅頭ほしいとッシ頑是なき。詞エ、何いふのぢやつつともう。性もない子供のいふ事。取上げて下さりますな。ナウ三作。何のそなたが其樣な。法度を破つてたまるものか。サアちやつと言譯しやいのと。地つき出せば顏ふり上げ。詞いかにも弟が訴人の通り。鹿殺しは私でござります。コレ〳〵〳〵。そなたは氣が上つたか。狼狽へる所ぢやないぞや。イ、ヱ。狼狽へはしませぬ。わしが手にした事。覺えのない狩人の。仲間の衆に吟味が懸り。ひよつとどうした人違ひで。爺樣の難儀にならうとも知れぬ。夫が悲しさ尋常に名乘つて出ます。常々お前の話にも今の爺樣は義理のある親ぢや程に。猶大切に孝行せいと。ソレ云はしやつたを。わしや能う覺えて居ますわいの。地わしが所刑にあつた跡で。爺樣の泣かしやれぬ樣に。京の町へ奉公にやつたと。いうて置いて下され。詞是からは杉松を。私と二人前可愛がつてや。鹿や兎の命を取れば。どうで末は斯うなるもの。せめてあれ一人は狩人さして下さるな。地そればつかりを賴みます。さらばでござる母樣と。親の代りに罪科を。引受ける氣の立派さを。思ひ合せてハアはつと。今更未練なとめ樣も。諍ひやうもないじやくり。詞扨も扨

も。健氣なといはうか。産んだ子ながら恥しい。義理ある後の親夫。地わしやまだ恩を得送らぬに。大人も及ばぬ發明は。一生の智惠も壽命も十三年につゞめたか。こんな子を持つた親とひけらかしたい稀な子を。世にも稀なる大垣の。土の中へ生きながら。石子詰で殺すとは。なんぼ前世の約束でも。餘り慘い約束事。詞イヤ〳〵〳〵。なんぼうでも殺さぬ。〳〵。地〳〵と我が子にしつかとしがみ付き。涙の瀧にしめるにぞ フシいとゞ。喰ひ入る縛り繩。詞ヤア成敗極まる科人に返らぬ繰り言。今宵の中は寺中の法事。明六つの鐘つくを相圖に。山下の土中を掘つて石子詰の刑罰。最早七つ。もう一時。刻限移ると引立つる。なう胴慾な。いはゞ畜生一定を。殺した科を夫程の。御成敗にも及ぶまい。御出家のお慈悲には。どうぞ助けて下さりませ。地叶はぬ事なら土の中。母も一所に埋んでと。取り付く島も袂の岸。涙に漂ふかれ船。繩目の綱は親子の別れ。見返る姿霧霞フシ飛ぶが如くに引立て行く。地母は正體腰もぬけ。詞ヤレ三作よ待つてくれ。地思へば〳〵今日の日は。わが身一人の惡日か。由緒正しい武士の子を。一生狩人山賤に。朽果てさするばかりかは。所の法に行はれ。非業の死は殺生の。罰か報ひか悲しやと。土邊に蹉跎と身を打付け。フシ聲を。はかりのこがれ泣き。ウタと患を拂ふ玉箒。ナホス いかな大事も好物に。醉うてはころり芝六が。機嫌上戸の。ちろちろ戻り。詞ヤア女性。是におはすか。此冷えるに地邊に轉りは。扨は貴樣も醉醒しか。久しぶりの色事。地ドレ抱いてやらうと手を取れば。詞ヤア此方の人か。ハア悲しや。南無三きやつ泣上戸。我等は悲しうても笑ふ。貴樣は目出たい事にも泣く。イヤ又此樣な嬉しい折から。祝うて地一つ泣き給へと。餘念たわいも泣顏を。見せじと妻も氣を取り直し。泣く泣く笑顏繕ひて。詞ホンニ又何處でやら。きつい機嫌で戻らしやんした。さうしてマア。最前の捕人の侍。取り卷かれてどざんした。其仕舞はどう付いたえ。サレバ〳〵。そこをぬかつてよい物か。此能う廻る舌を以て。立板に水を流す如く。とんと匿ひませぬにて。すつぱりと言拔けて戻つた。雨降つて地固ると。是からは猶あなた樣も。帶紐といておかくまい申してよいといふ物ぢや。ナ。そぢやないか。ヤお天子樣の御機嫌はどうぢや。マア〳〵悦びや。今日の日天樣がかぐれ樣にならしやましたらこそ。斯ういふ内へお成りなされて下さるといふは。有難いといはうか忝いといはうか。目出度いといはうか。嬉しいといはうか。これが悦

ばずに居られうか。ナ左様ぢやないか。まだ嬉しい事があるわ。明日の明六つがどんと鳴ると。鎌足様が爰へござる。そこで勘當御赦される筈。淡海様の請合ぢや。日頃の願ひ叶ふは明日。餘り嬉しさ身祝に。呑酒屋叩き起して御神酒五合供へた。エ、忝い。〳〵。コリヤ。坊主よあすからは元の侍になつて。われにも大小さゝすぞよ。ヤ兄は何所に居る。三作よ。作よ。地〳〵は胸を裂く。妻の苦しみ。詞イ、エイナ。作はお前の戻りが遲さ。一人獵に行くというて。エ、夜の内に何所へ滅相な。もう獵師はさゝぬ。弓取に仕立てるはあすの夜が明け次第。イヤ。もうそろ〳〵白みかけるぞ。出世の雲が見えるぞ〳〵。有難い。〳〵。早う明六つが鳴つて下され天道様。頼みます。〳〵と。地祈る夫が空を見つ。覗く表も裏表。夜明は我が子の最期時。どうぞ此夜が。百年も明けずにあつてくれかしと。胸の阡陌の色々に。嬉しいも六つ。悲しいもッシ六つ無量の物思ひ。詞ア、おりや最う今夜は丁度元日を待つ心地。果報は寢て待て。ちよつとの間いねつまう。坊主はおれが懐にと。地こつぼり被る蒲團より早やとろ〳〵の草臥寢入。地何にも知らぬ悅び寢顏。それというたら三作が。心も無足に夫の命。それも悲し我が子も可愛し。心は千々に鳴る鐘を。早や撞き出す興福寺。合詞ハア南無三寶。アノ鐘の地數に縮まる子の壽命。一つの命を二つに分け。養ひ親への孝行心。ほめてやつて下されと。言ふもいはれぬ女房が。心の苦痛三つ。四つ。重ねて戀く胸先は。斧鉞に打たるゝ心地。五體五つにいつの世の。報いを爰に。修羅の鐘。打切る六つはヤア知死期かとわつと叫ぶは一時に。蒲團の中も血の涙。寢入り伏したる稚子の。咽ぶえ疊にぬうたる刄。詞ヤア杉松をむごたらしい。酔狂ひか亂心かと。地涙もいつそ。狼狽へて咽へ流るゝ。スエテ呆れ泣き。芝六居直つて聲を上げ。詞中將淡海公へ申上ぐる。玄上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ。最前の捕人は。拙者が心を引き見給ふ。鎌足公の廻し者と。氣は付きながら情ない。人質に心迷ひ。彌もつて御疑ひを重ねたれば。天子も爰には置き給はじ。冥加に叶ひ。一天の君を匿ひ申す。身の大慶も水の泡。勘當御免もなき時は。生きても返らぬ心外。悴を切つても他言致さぬ魂を。今改めて御覽に入れる。詞コリヤ女房。張詰めた太郎が義心。大事の心底見せ損うたは。三作といふ其方の連子元は桑の益勝と云ふ樂官の女房。蝦夷の讒にて潰れた家。力になつて下されと。頼まれての後妻。地義理のある子が枷になつて。鎌足公に

根性を。見下げられたが口惜しさに。さし殺したは。二人が中に出生した此杉松。科はなけれど主人へ面晴。鬼になつてと醉うた顔。酒ではなうて劍を呑む。侍の義理が。敵ぢやと。詞思ひ諦め。坊主が代りに隨分兄を。可愛がつてやりやいのとスエテどうど坐して。泣きければ。詞ナウコレ夫程に思うて下さる。其兄の三作は鹿殺しの科人になつて。縛られて行つたわいな。ヤア。〳〵〳〵。すりやおれが科を身に引受けて。名乘つて往たか。地エ、それ殺してはと狂氣の如く。駈出す弓手の岩壁に。詞太郎暫しと聲あつて。地内大臣鎌足公。神事の禮服小忌衣。心葉の冠梅が香のオクリ匂ひ。殘れる采女の御方。手に捧げたる內侍所ッシ悠然と。出で給ひ。詞玄上太郎心底慥に見屆けたり。我敵の亂を避け。餘所ながら守護する天子。一日にても其方が。御難を避けしはあつぱれ忠義。入鹿が心をかけたる采女。久我之助に言含め。猿澤の池に入水として。此興福寺の山奥に。鎌足諸共隱れ住む。今日計らず汝が悴。大垣の刑に行なふ所。不思議に命助つたり。三作參れと仰せの下。地上下改め靜々と携へ持ちし寶の箱。地明けて我が子の無事な顔。詞ヤアまだ生きて居てくれたかと。地思ひがけなきフシ夫婦が悅び。詞ヲ、不審尤も。天皇御惱の祈の爲。天の岩戸の古例を引き。天照大神に祈誓をかけ。百日の行滿ずる今日。爭ひ難き神の力。刑罰の地に掘穿つ土中に怪しき光り物。能く〳〵見れば先年失せさせ給ひたる。內侍所神璽の御箱。地入鹿が父蝦夷大臣疾より謀叛の根ざしにて。埋み隱せし二種の寶顯れ出でしは是正に。神明の助け給ふ三作が命。詞今改めて鎌足が三代の忠臣。さりながら鹿を殺せし春日の掟。同じ血脈の弟が死骸を埋め刑罰の。表を立てて菩提の爲。標の石の其上に。撞鐘一宇は鎌足が。改めて建立せんと。地仰せは今に曉の。六つに死したる七つ子の數を合して。十三鐘の音にぞ。フシ哀れ殘りける。地鎌足重ねて。詞此八咫の御鏡は天照大神の。御影を寫せし御正體。勿體なくも蝦夷大臣。穢れし土中に埋み置く。地其故にこそ一天の御影を曇らせ。御目盲させ給ひしも日月の鏡曇りし故。詞我が行法の今日に當つて。御鏡出でさせ給ふ事。常闇の世の岩戸を開き。天照神と天皇の御對面の時至れり。出御さふと奏聞の。地聲に應じて淡海公。御手を取つて立出づる。折から向ふ鏡の光。フシ朝日の影に蘇きて忽ち御目も明らかに。ナウ懷かしの帝樣。采女是にと走り寄り。互にゆかしき物語りフシ御戀中も恐れあり。詞ヤア〳〵太郎。汝が射たる爪黑の。鹿は入

鹿が調伏にて。地頓て太平萬乘の御代知し召す暫くも。詞民間に落ち給ひしは天より地中に落ち給ふ。地是ぞ稀なる天智帝。御目も將に秋の田の。刈穂の庵の假御殿。木の丸殿に准へて。今日の出陣の城廓に悪魔追伏興福寺は。我が藤原の氏の寺。いさや。これより臨幸と。先を拂つて鎌足の。威風凛々綸言の。ヲシ汗か涙の露にぬれ。草葉に置ける芝六が。妻戀ふ雉や子故の闇。明けてもくらき六つ七つ十一十二。十三鐘の古跡を。今に傳へける

第三

地奈良の都の八重九重。禁裏守護の太宰の館。入鹿公のお成とて。ヲシさゞめき渡る奥女中。地荒牧彌藤次一間を出で。詞コリヤ仕丁ども。今日は入鹿公御目出たの御悦びに。奈良の町へ入込の諸職人。商人藝者に受領を下されんとの勅諚。相詰めたる町人ども一人づつ呼出せ。地はつと答へて立出づる。縣召かや諸人に。司を給びてそれ〳〵に。國名を付きし烏帽子子の。始めにかけし烏帽子屋が。身を立烏帽子兩眉は。三大臣のお召とて。スエテ高き位や懸烏帽子。十二の冠式法の。烏帽子屋なれば平七を。頭平と受領なされける。跡へ出でたは ヲシ烏帽子に白丁。地彌藤次きつと見。詞フウ其方は神職な。神職ならば何故吉田に參つて受領を受けぬ。イヤ拙者めは鹿島の事觸。當年は辛の卯の年祭り年とござつて。鹿島の御寶殿よりでつかちない光り物が飛び出で。神の扉が八文字に披け神馬の四足に大汗をかいてござる。禰宜神主是を歎き御湯を捧げて七座の齋。時にお鹿島の御託宣に氏子共が下用櫃にしやりを切らして。むらつぎをするであろと。人の物でも手まはり次第打殺して其日を凌げ。むくりこくり地の底より潤はして米は下直に。錢は高うさしてやろとの御託宣でござる。無上禮法新兵衛嘉兵衛。拂ひ給へ清めて給ふとヲシ喋りける。詞扨は汝事觸よな。向後そちが受領には。地口松の差出の頭佐平次と。ゆるせし跡へぽつとしよ髪。言はねど手足黒々と。鍛冶屋の木梃の柴てんからり。ころり。てん〳〵からりの相槌に打つや。打ち物元が燒刄の燒物なれば。備前の守 ヲシとや名にし負ふ。地櫻に色香取交ぜて。手品やさしきびんざさら。歌京の水色よい染上の。との茶小紋に見初めて染めて。醉うてぢやらくら笹の葉小紋。今夜必ず必ずやいの。松葉小紋の戸明けて門にちつとやつて下ん。ナボス詞シテ汝は伊勢か熊野か。イヤ私は伊勢比丘尼。それならば比丘尼の司。地お兩なんどとヲシ岩稍の。地樫作りのどつ

てう聲。詞アイおらは攝州西成の郡。上福島の船乘でございます。それならば大名の船歌。上つ方には珍らしからん。謠へ〳〵の聲につれ。弁歌エヤつるつつともいつきやなち來てな。小側に立寄り見てあれば。おんめんもとはころり。ころりんなころ〳〵とも。こんころがしやりかの。しやなりんがちよろ。よけんれんばまたのいよほん。ほんぼ若枝や。はんは葉もイョエ榮えやはんは葉も。ろやんはいよイョエさらへ。謠ひ納めしナホス船歌に。彌藤次は聞入つて。詞ヲ、出かした〳〵。此後は其方を船の頭となすべしと。地言ひしより名を船頭と。名付けし跡へ道心者。風呂敷肩にひよつか〳〵。詞コリヤ〳〵汝。所化ならば上人和尚になりたい望みか。イヤ〳〵。愚僧は願人坊主。寺號をお赦し下さりませ。ム、願人とは何の宗旨。されば八宗九宗をもれ。二季の彼岸は鉦太鼓で町々を。六齋念佛。地お目にかけうと風呂敷より。取出し始める太鼓の拍子。歌やあん楊柳子。〳〵。南天龍膽金銀花咲いた。合銀杏金柑楊梅寒梅瓢箪鳳仙花。やあん鐵仙花。〳〵。梅檀沈丁芙蓉林檎。長春半夏草。エ、スエ〳〵りよ。エ、スエスリョ。こんりやう。エ、ス、リョ。こんりやうこんしんこんりやうこんしん〳〵。こすへぶくぶくいしせほろみとす。ナホスと打納め。詞扨盆前の施餓鬼には。鐃鈸なんど打鳴し法界の。地施餓鬼〳〵と六字詰。音頭七月二十四日には。地藏菩薩を脊たら負ひ林清詞一つや二つ三つや四つ。十より内の嬰子は。小石拾うて塔と積み。一重積んでは親の爲。二重積んでは。鄉里兄弟我が身の爲と。ナホス地同向する。庚申にはと丶打つて。詞庚申の代待。地扨傘に。赤前垂を腰に卷き。住吉踊。歌四社のお前で。扇を拾うた。ハンヤ扇めでたや末繁昌。サ住吉樣の岸の姫松めでたさよ。白かんかねのべてのうソレ襷にかけて。よね〳〵はかるせきのと。せんとととのやさらば〳〵エ。ナホス踊り了へば彌藤次も。詞是はしんどい宗旨ぢやな。向後は其方を。曉山西方寺と寺號をお許しなさるゝぞ。ハア、有難し忝しと。地悅び勇む春駒は。合歌めでたや〳〵。春の初めに春駒なんど。夢に見てさへよいとや申す。ドウ〳〵〳〵〳〵。三吉乘つたか。右の袂に三七三夜。左の袂に三七三夜。合兩方合せて六七六夜。ドウ〳〵〳〵〳〵。ナホス勇み舞うたる春駒が。轡の紋もきつぱりと。好い男ども友禪の。二上り歌伊達な下着を一つ前。ナホス横目つかうて白洲につくばひ。詞私は堺の素人淨瑠璃。三右衛門と申す者。政太夫は播磨。若太夫は越前。筑前大和と受領致す。是は大坂の名人藝。

私は太夫號を下さらば有難うござります。ナニ淨瑠璃を語るとな。幸ひ〳〵。奥女中も聞きたがる。無間の鐘を所望々々。これは迷惑。私はちやり聲で歌事は參りませぬ。地いかぬを是非にと懶威の所望。迷惑ながら聲張り上げ。詞テ、テン〳〵テン〳〵石にもせよ。金にもせよ。心さす所は無間の鐘。其金袋にと三百兩。深山おろしに山吹の花吹き散らす。地われ聲にて。語れば拠も。怖い聲。詞最前の桑鑵屋と。一處に置いたらよからうと。地どつとフシ笑ひを倒せり。詞ヲ、一興一興面白し。梅が枝は諸木に先立ち咲く花なれば。三右衛門も向後は咲太夫と改むべしと。地仰せにはつと悦びて。お禮申せば殘りし受領。又明日と言渡し。オクリ何れも。フシ白洲を立出づる。地召に應じて大判事清澄。袴の襞横も角菱ある。不和なる中の定香が屋敷。互に夫と白書院。フシ目禮もせずつつと通り。詞入鹿公の御座の間へ。誰そ案内仕れと。地言捨てて行かんとす。定香聲かけ先づ暫く。詞珍らしや大判事殿。太宰の少貳が跡目を預る妾が屋敷。挨拶もなくお通りは女と思ひ侮つてか。但し武家の禮儀御存じなくば少と御傳授申さうかと。地詞の非太刀フシ打掛捌き。地騒がぬ清澄空嘯き。詞少貳存生より領地の遺恨に依り。此屋敷の内へは今日迄足踏もせぬ大判事。入鹿公のお召によつて參つたは勅諚を重んずる故。皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ。挨拶する口は持たぬ。イヤそれなれば猶もつて。今日入鹿様お成なれば大内も同然。大判事に御疑ひの事あつて。此定香に吟味致せとの勅諚。此詮議濟まぬ内は一寸も御前へは叶はぬお控へなされ清澄殿。ム、ハテ珍らしき事を聞く。君御詮議の筋あらば檢非違使に仰せて。拷問あらんに何の御遠慮。元來御疑ひ蒙るべき覺えなし。生殺き女の吟味。受ける様な清澄でおりない。お身見事詮議して見るか。ヲ、太宰の後家此定香が。屹度詮議して見せう。イヤ小癪な。其處退いて早や通せ。罷りならぬと根に持つ遺恨。地互に折れぬフシ老木の柳。松の間の襖押し開かせ。出御なりと警蹕の。聲に二人も飛び退り恐れ。フシ入つたるばかりなり。地入鹿の大臣寛然と。上段の褥より遙に見下し。詞ヤア大判事。未明より參内せよと。勅使を立つるに甚だの遲參。アレ見よ今日は午の上刻。流星南に出でて北に拱するは。萬乘の位に卽く丸が吉星。それ程の事知らぬ大判事でなし。但し。入鹿に仕へるが不足と思ひ。身を退かん下心か。緩怠なりときめ付くれば。コハ御諚とも覺えず今一天四海君の御手に屬するとは云ひながら。いまだ殘黨先帝に

心を寄する族あつて。帝都を窺ふ折から。我等が領地紀伊國は。西國南海の咽首にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに際なければ思はざる遲參。其上忠臣第一の大判事に。何事の御疑ひと ッシ憚なくぞ申しける。詞ホ、其仔細といつば。先帝の觀櫻采女の局を。丸が後妃に定めんと行方を尋ね求める所。猿澤の池へ入水せし由。いかにしても合點行かず。察する所采女が所在は。大判事其方がよく知らうがなと。地思ひがけなき疑ひに。清澄不審の眉を顰め。詞コハ存じ寄らざる儀。其采女の御事は。猿澤の池に捨身ありしとは。誰知らぬ者ござなきに。我等が行方存ぜしなどとは。何を目當の御仰せなるぞや。ヤアとぼけな。汝が悴久我之助は采女が附人ならずや。其親たる其方なれば。よも知らぬとは言はれまじ。サア眞直に白狀せよ。陳するに於ては計ふべき旨あり。イヤなう大判事殿お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とは此事。サア覺えがあらば申されよと 地言はせも立てず。イヤ默り召され。詞女の差出る所でなし。イヤ勅諚を受けての詮議なれば。勅答の有無に依つて。其座はちつとも立たしはせじと。地膝立直し詰寄つて。ッシ双方挑み爭うたり。地入鹿大臣大口明き。ハヽヽ。詞イヤ巧んだり拵へたり定香が領分大和の妹山。清澄が領地紀の國脊山。隣國境目の論に依り。互に確執せしとは表の見せかけ。內々には申合せ。故主の帝へ心を通はす汝等と。我が眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は兩家の中に隱し置かんも知れざる故。大判事が詮議を申付けた定香コリヤ其方にも此疑ひはかゝるぞよ。是は又君の勅諚とも覺えませぬ。それ少貳より中惡き大判事殿。何故中合さう樣もなし。地私に迄お疑ひは恐れながら。詞言ふな女め。左程音信不通の中なるに。大判事が悴久我之助。其方が娘雛鳥と。密通致し居るは如何に。イヤ知るまじと思ふか。悴共が緣に繫がれたる汝等なれば。兩方ともに吟味は遁れぬ。地何と肝に徹うがと。飽迄邪智の一言に。何思ひけん大判事席を蹴立て行かんとす。隙さず定香が刀の鐺むんずと取り。詞コレ待ち給へ清澄殿。氣相かへてコリヤ何處へ。何處へとは。親々が不和なる中を存じながら。忍び逢ふ悴が不所存。引捕へて吟味せねば。子供が緣を幸ひに和睦せしと言はれては。我が家の恥辱となる。ヲヽそりや此方も同じ事。一日武士の意地。今更中が直りたいばかりに娘に蹤と不義させしと。世上の人に蔑せられては。過逝き給ふ夫へ立たぬ。地妾も共にと裾引上げ。脏出す二人をはつたと睨め。詞私の趣意に立騷ぐ尾籠やつ。汝らが悴の不

義を吟味はせぬ。丸が尋ぬるは采女が所在。サア何れからなりと早く言へ。何と〳〵イヤ悖が性根はいさ知らず。采女殿の儀は曾て存ぜず。我が詞に偽りあらば弓箭神の御罰を受けんと。地刀すらりと抜放し。丁々と金打し。詞此上にも御疑ひあらばいか程の拷問なりとも。サア遊ばせとどつかと坐す。ヲヽ妾とても少貳が妻。家に換へて采女殿は匿はぬ。地水責火責に逢ふとても。知らぬ事は存じませぬと ッシ詞するどにいひ放す。詞ムヽ然らば采女が詮議は追つて。先づ汝等が面晴なれば。匿はぬといふ潔白に。定香は雛鳥を入内させよ。又大判事も覺えなきに相違なくば。久我之助は今日より。朕が目通りへ出勤させよ。急度其旨心得よと。地何がな探る當座の難題。二人は胸にぎつくりと。答へも ッシ暫しなかりしが。地やゝあつて詞を揃へ。詞斯く有難き勅諚を。互の子供が違背致さば。ヲヽ地言ふにや及ぶと邊なる生け置く櫻の一枝押取り。詞得心すれば榮える花。背くに於ては忽ちに。丸が威勢の嵐にあて。まつ此通りと欄に。地はつしと打折り落花微塵。はつとばかりに親々の。心も共に。ッシ散亂せり。地猶もゆるまぬ大晉上げ。詞ヤア〳〵彌藤次早く參れ。汝は百里照の目鏡を以て。香具山の絶頂より急度遠見を仕れ。コリヤ〳〵兩人よつく聞け。若し少しでも容赦致さば兩家は沒收。從類までも絶やするぞ。地性根を定め早や行けと。せき立つ諚意に親々の。思ひは千々の胸の中。見せぬおもてに。忠と義を。張り詰めし氣のたゆみなく。打連れてこそ。ッシカヽリ出でて行く。誠に秦の趙高が。馬と欺く小牡鹿の。入鹿が威勢ぞッシ類ひなき。地かゝる所へ中門より追々駈入る鎧武者。御注進と呼ばはつて。御白洲に頭を下げ。詞河内の國に武智郡司安彦。先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを。官軍殘らず馳向ひ。敵を攻付け一宴夜に落城。大和に安曇の文次宗秀。當麻の邊に陣を取り。地南都を攻むる其結構。馳向うて戰ひしに味方の。官軍利を失ひ。殘らず敗北仕ると息つぎ敢ず言上すれば。ハヽヽ詞物數ならぬ逆徒の奴輩。朕馳向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし。希代の名馬。吉野の牧より狩出したる。其馬引けと廣庭へ引出させ。地欄より。ひらりと ッシオクリ打乘り。名馬の勇み。合手綱かいくりしと〳〵〳〵。合轡の音はりん〳〵〳〵。綸言誰か背くべき。大地狹しと馬上の勢ひ。刻む蹄も街の衒。いぞふれ。やつと出陣の駒を早めて。三蔵へ駈けり行く。地古の神代の昔山跡の。國は都の始めにて。妹脊の始め山々の。中を流るゝ吉野川。塵も

芥も花の山。實に世に遊ぶ歌人の。ッシ言の葉草の捨所。地妹山は太宰の少貳國人の領地にて。川へ見越の下館。脊山の方は大判事清澄の領内。子息清舟日外より爰に勘氣の山住居。伴ふ物は巣立烏谺と我と只二つ。經讀む鳥の音も澄みて。フシ心細くも哀れなり。春女夫地頃は彌生の初めつかた。此方の亭には雛鳥の氣を慰めの雛祭。桃の節句の供へ物。萩の强飯腰元の。小菊桔梗が配膳の腰も。すうはり春風にオクリ柳の。フシ楊枝はし近く。詞ナウ小菊。いつものお雛は御殿でお祭りなさるれど。姫様のおしつらひで此山峯の假座敷。谷川を見晴し櫻の見飽。雛様も一入お氣が晴れてよからうの。此方も追付け好い殿御持つたら。常住あの様に引つついて居たら嬉しかろ。フウ桔梗の何言やるやら。何ぼ女夫並んで居てもあの様に行儀に畏つてばかり居て。手中に親と〳〵は昔より。御仲不和の關となり逢ふ事さへも片糸の。結ぼれとけぬ我が思ひ戀し床しい清舟様。此山の彼方にと聞いたを便り母様へ。詞お願ひ申して此假屋。お顔が見たさの出養生爰迄來れども。山と山とが領分の境の川に隔てられ。地物いひかはす事さへもならぬ我が身の儘ならぬ。今は中々思ひの種。いつそ隔てて戀侘びる。逢はれぬ昔がましぞかしと。切なる思ひかきくどき歎けば共に腰元ども。お道理でどさりますほんにひよんな色事で隣同士の紀伊國大和。御領分のせり合で。詞お二人の親御様はすれ〳〵。雛鳥様と久我様の。妹脊の中を引き分ける妹山脊山。船も筏も御法度で。たつた

を握る事さへならぬ窮屈な契りは厭や。地肝心の寐る時は離れ〳〵の箱の中。思ひの絶える間はあるまいと。仇口々も雛鳥の。胸に邊の人目せく。辛い戀路の其

此川一つ。つい渡られさうな物。小菊瀬踏して見やらぬか。ヲ、滅相な。此谷川の逆落し。紀州浦へ一つてきに流れて住たら鮫の餌食。したが申し雛鳥様。お前の病氣をお案じなされ。此假屋へ出養生さしなさつたは。餘所ながら久我様に。お前を逢はす後室様の粋なお捌き。女夫にして下さりませと。直にお願ひ遊ばしたら。よもやいやとは 地岩橋の渡ることこそならずとも。せめて遠見にお姿をと。障子ぐわらりと縁端に。覗きこぼるゝ腰元ども。 染太夫 地 久我之助はうつ〳〵と父の行末身の上を。 スエ 守らせ給へと心中に。念彼觀音の經机。案じ入りたる顏容。 春 地 手に取る様にナウあれ〳〵。 詞 机に靠れて久我様の。物思はしいお顏持。 地 お癪がなおこりつらん。 詞 エ、お傍へ行きたい。コレ爰に居るわいなと 地 いへど。招はず浮む時は願成就。吉野を假の御祓川ぬつらさ。 詞 エ、しんき。こちらが思ふ様にもない。コレこつちや向いて見たがよいと。 地 あせるお傍にッシ氣の付々。 詞 ほんにそれよ。口でいはれぬ心のたけ。 地 兼て認め奥山の鹿の卷筆封じ文。戀し小石に括り添へ。女の念の通ぜよと祈願をこめて打つ礫。からりと川に落ち瀧津波にせかれて流れ行く。 詞 エ、どんな。心の念は屆いても。 地 女力の屆かねば思うたばかり片便り返事を松浦佐用姫の。石になりともなりたいと。ひれ伏す山のッシかひもなき。 染 地 久我之助川に目を付け。 詞 何處よりか水中に打つたる石は重けれど。逆卷く水の勢ひに沈みもやらず流るるは。エ、重き君も入鹿と云ふ逆臣の水の勢ひには。敵對難き時代の習ひ。夫を知つて暫しの中。敵に從ふ父大判事殿の。心善か 地 悪かを三つ柏。水に沈めば願ひ叶はず浮む時は願成就。吉野を假の御祓川太神宮へ朝拜せんと。柏の若葉摘取つて谷を傳ひに水の面。 春 地 見やる女中が申し〳〵。 詞 今の小石が屆いたか。久我様が川へ下りなさるゝ。あの岩角のをり曲りが。川端がいつち狹い。幸ひのよい逢瀬と。 地 いふに嬉しき雛鳥の。飛立つばかり振袖も。裾もはら〳〵。坂道を折から風に散る花の。櫻が中の立姿しどけ難所も厭ひなく。ナウ久我様か懐かしやと。 染 いふに思はず清舟も。雛鳥無事でと顏と顏。見合すばかり遠き間の。 春 心ばかりが。 染 抱き合ひッシ詮方涙先立てり。 春 詞 申し清舟様。わしやお前に逢ひたさに。病氣と言立て爰迄來て居れど。 地 親の許さぬ中垣に忍んで通ふ事叶はず。女雛男雛も年に一度は七夕の。逢瀬はあるに此様に。お顏見ながら添ふ事の。ならぬは何の報いぞや。妹脊の山の。中を隔つ吉野の川に鵲の。 スエ チ 橋はないかと口說

き言。染地聞く清舟も捍あらば早や渡りたきゆかしさを。胸に包みて。詞道理々々。我も心は飛立てど。此川の法度嚴しきは親々の不和ばかりでない。今入鹿世を取つて君臣上下心々。隣國近邊といへども親みあらば徒黨の企てあらんかと。互に通路を禁めて船を留めたる此川は。領分を分ける關所も同然。地命だにあるならば又逢ふ事もあるべきぞ。今流したる水の柏。詞波にもまれて浮みしは心の願ひ叶ふ知らせ。地入鹿が掟嚴しければ我も世上を憚りて。此山奥の隱住み心の儘に鶯の。聲は聞けども籠鳥の雲井を慕ふ身の上を。思ひやられよ雛鳥と。スエテ儘ならぬ世を恨み泣き。春詞ナウ又逢ふ事もあらうとは別るゝ時の捨詞。縱へ未來の父樣に御勘當受くるとも。わしやお前の女房ぢや。地とても叶はぬ浮世なら法度を破つて此川の。早瀨の波も厭ふまじ。何國如何なる方へなと連れて退いて下さんせ。詞私はそこへ行きますと。地既に飛込む川岸に。周章騒き留むる腰元。イヤ〳〵放しやと泣き入る娘。染詞ヤレ短慮なり雛鳥。山川の此早瀨。水練を得たる者だに渡り難き此難所。忽ち命を失ふのみか母後室に歎きをかけ。我にも彌憎しみかゝる。科に科を重ねる道理地必ず早まり召されなと。制する詞一筋に。春思ひ詰めたる女氣もッシ今更弱る折こそあれ。染詞大判事清澄樣御入りなりと知らする聲。地はつと聲き久我之助歸るを名殘春押しとむるも。我が身を我が身のまゝならず。コレなう待つての聲ばかり。詞後室樣御出と。地告ぐる下部に詮方も。なく〳〵庵の打委れ登る坂さへ別れ路は。オクリ力へ難所を行く心地ッシ空にしられぬ花曇り。染地花を歩めど武士の心の嶮岨刀して。削るが如き物思ひ。思ひ逢瀨の中を裂く。川邊傳ひに大判事清澄。春こなたの岸より太宰の後室。定香にそれと道分の石と意地とを向ひ合ふ。川を隔てて。詞大判事樣。御役目御苦勞に存じますと。地聲打掛をかい取りの夫の魂。フシ放さぬ式禮。染地清澄も一捍し。詞早かりし定香殿。御前を下るも一時參る所も一つなれども。此脊山は身が領分。妹山は其許の御支配。川向ひの喧嘩とやら睨合うて日を送る此年月。心解けるか解けぬかは今日の役目の落居次第。二つ一つの勅命。地狼狽た捌きめさるなと眦。フシくしやつく炙道。春地脇へかはして仰の通り。詞入鹿樣の御諚意は。お互に子供の身の上受合うては歸りながら。身腹は分けても心は別々。若しあつと申さぬ時は。マアお前にはどうせうと思召す。染知れたこと御前で承つた通り。首打放す分の事さ。不所存の悴はあつて益なくなうて事

缺けず。身の内の腐は殺いで捨つるが跡の養生。畢竟親の子のと名を付けるは人間の私。天地から見る時は同じ世界に涌いた蟲。別に不便とは存じ申さぬ。春ハテきつい思し切り。私は又いかう料簡が違ひます。女子の未練な心からは。我が子が可愛うてなりませぬ。其代りにお前のお子息様の事は。眞實何とも存じませぬ。只大切なは此方の娘。忝い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸ひ。たとへどう申さうとも。母が勸めて入内させ。お后様と多くの人に敬ひ傳かさうと思へば此様な嬉しい事はございませぬホ、、、と フシ空笑ひ。染詞ム、シテ又得心せぬ時は。春ハテそりやもう是非に及ばぬ。枝ぶり悪い櫻木は切つて接木を致さねば。太幸の家が立ちませぬ。染ヲ、さうなくては叶ふまい。此方の悴とても得心すれば身の出世。榮華を咲かす此一枝。川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流るゝは吉左右。花を散らして枝ばかり流るゝならば。悴が絶命と思はれよ。春いかにも。此方も此一枝。娘の命生花を。散さぬ様に致しませう。染ヲ、サ今一時が互の潮越し。此國境は生死の境。返答の善悪に依つて。遺恨に遺恨を重るか。春サアこれ迄の意趣を流して。中吉野川と落合ふか。染先づそれ迄は双方の領分。春お捌きを待つてをりますと。地二人詞峙つ親と親。染山と大和路分れても。二人變らぬ紀の路恩愛の。春胸は霞に埋もれし オクリ庵の春染〳〵内にフシわかれ入る。地立派に言ひは放しても定かに知らぬ子の心。覺束なくも呼子鳥。娘々と谷の戸に。音なふ初音雛鳥も。母のフシ機嫌をさし足に。詞母様ようぞ。今日はお目出たう存じますと。フシ武家の行儀の三つ指に。地堅い程猶親子の親しみ。詞ヲ、よう飾が出來ました。今日は其方の顔持もよささうで。一入目出たい。母も祝うて献上の此花。供へてたも。幾才になつても雛祭は嬉しいもの。女子共何なりと。娘が氣に合ふ遊びをして。隨分と勇めてくれと。地いつに勝れし後室の機嫌は訴訟の好い出しほ。詞今のをちやつと乘り出して御覽じませと。地腰元に。腰押されても兎や角と。フシいひそそくれの縺れ髪。詞イヤなう雛鳥。脊たけ延びた娘を。親の傍へ引付けて置くは結句病の種。それで急に思案を極め。和女によい殿御を持たす。嫁入さすが嬉しいか。エ、。ハテ氣遣ひ仕やんな。可愛い娘の一生を任す夫。和女の氣に入らぬ男を何の母が持たさうぞ。ナア腰元ども。ハイ〳〵。左様でございます。お氣の通つた後室様。嫁入の先は大方今のナ焦るゝ君でございませうと。地押し推當ども得手勝手。誰にか緣を組紐に。胸は眞紅のふ

さがる箱取り出し。妹脊をならぶる雛の目は嫁入の吉日。此箱の主は極まる殿御。雛の御膳で夫定め。コレ和女の夫と云ふは誰あらう。入鹿大臣様ぢやわいの。エヽそんならわたしを嫁入さすとは。ヲヽ太宰の少貳が娘雛鳥。美人の聞え叡聞に達し。入内させよと有難い勅諚。エヽイ。地はつと悔りうろ〳〵とスエテ詞は涙。ぐむばかり。詞ヲヽ肝が潰れる筈。夫と申すも畏れ多い。一天の君を聟に取る家の面目。日本國に此上のない嫁入の隨一。果報な娘。此様な目出たい事がある物かナア女子共。ハイ〳〵お目出たいと申さうか。いつそ鬼賊でござりますと。地工合違ひの嫁入に。菊も桔梗も投げ首の。フシ二人は小腹立てて行く。地母の心も色色に咲き分けの枝差出し。詞親の赦さぬ言ひかはし私通は呵つて返らず。一旦思ひ初めた男。何日迄も立通すが女の操。破りやとは言はぬが。貞女の立様がありさうな物。とつくりとよう思案しや。此花は八重一重。互に不和なる親々の。心捕はぬ二つの花。一つ枝に取り結び。切放すに離されぬ黒縁の仇花。今和女の心次第で。當時入鹿大臣の深山颪に炊き散され。久我之助は腹切らねばならぬぞや。雛鳥と縁を切つて入鹿様に降參すれば。清舟も命を助かる。知らせは川へ流す櫻。散るか散らぬが身の納り。時に從ふ風に靡き。君が手活けの花になれば。八重も一重も恙なう。九重に傅かるゝ互の幸ひ。戀しと思ふ久我之助。助けうと殺さうと今の返事たつた一つ。貞女の立て様サア〳〵見たいと。戀も情も辨へて。地義理の柵せきとめても涙せき上げ〳〵ながら母様段々聞わけましたお詞は背きませぬ。詞そんなら得心して入内してたもるか。アイ〳〵ヲヽ嬉しや。出かしやつた〳〵。夫でこそ貞女なれ。馴れぬ雲井の宮仕へ。武家の娘と笑はれな。地今日より内裏上臈の。詞髪も改めすべらかし。祝うて母が結直してやりましよと。地いそ〳〵立ちは立ちながら娘の心思ひやり。別れて櫛のはかなさも。解きほどかれぬ憂き思ひ。染重き脊山の。フシ庵の内。地父が前に謹んで。詞久我之助が心底聞し召し分けられ。切腹御赦免下さる事。身に取つていかばかり大慶至極と手をつけば。地默然たる大判事。良打潤む。フシ目を開き。詞今朝入鹿大臣此大判事を召出し。先帝寵愛の采女。身を投げ死したりとは偽り。其方が悴久我之助。人知らぬ方へ落しやりしに極れば。必定汝等が方に匿ひあるべしとの難題。元來知らぬ大判事。よく〳〵思へば采女の御難をさけん爲。猿澤の池に入水の體にもてなして。密に落し參らせしは。なか〳〵久我之助が智

惠でない。鎌足公の差圖を受けての計らひと。知つたは身も今日が始め。親にも隱し包みしは大事を洩さぬ心の金打。若輩者には神妙の仕方。ハヽア出かしたりと思ふに付け。地邪智深き入鹿。久我之助が降參せば命を助けん連れ來れと。情の詞に釣り寄せて。拷問にかけん謀。地責殺さるゝ苦みより切腹さすれば。采女の詮議の根を斷つ大功。天下の主の御爲には。何悴の一人など。葬に生える草一本。引くよりも瑣細な事と。涙一滴こぼさぬ武士の表。詞子の可愛うない者が凡そ。生ある者にあらうか。餘り健氣な子に耻ぢて。親が介錯してくれる。地侍の綺羅を飾り。嚴しく横たへし大小。悴が首を切る刀とは五十年來知らざりしと。老の悔みに清舟も。親の慈悲心有難涙。命二つあるならば君には死して忠義を立て。父には生きて養育の御恩を送り申さんに。今生の殘念是一つと。顏を見上げ見下してわつと平伏す。親子の誠。春こなたの亭には母後室。詞サア〳〵目出たい。和女の名の雛鳥を。其儘の内裏雛。裝束の付け樣も此女雛と見合せて。地サアサアッシ早うとありければ。地恨めしげに打守り。女夫一對何時迄も添遂げるこそ雛の德。思ふお人に引離され。詞何樂みの女御后。炎の絹の十二一重。雛の姿も恨めしと。地取つて打付け緣板に。ころりと落ちし女雛の首。驚く母の胸板に必死と極る。娘の命。包めどせきくるはらはら涙。詞娘入内さすというたは僞り。まつ此樣に首切つて渡すのぢやわいなう。エエそんならほん〳〵に。貞女を立てさして下さりまするか。アヽ添い有難いと。地伏し拜む手を取つて。ナウ入内せずに死ぬるのを。それ程に嬉しがる。娘の心知らいでならうか。詞あつと受けても自害して死ぬる覺悟は知りながら。和女の死ぬる事聞いたら。思ひ合うた久我之助。共に自害めされうも知れぬ。せめて一人は助けたさ。一旦得心したにして。母が手づから解いた髮は。下げ髮ぢやない。成敗のかき上げ髮。介錯の支度ぢやわいの。地高いも卑いも姫御前の。夫といふはたつた一人。穢らはしい玉の輿。何の母も嬉しかろ。詞祝言こそせね。心ばかりは久我之助が。宿の妻と思うて死にや。エエ是程までに思ふ中。一日半時添はしもせず。地饗の河原へやるかいのと。引き寄せ〳〵雛鳥もッシ膝に取付き抱付き。忝さと嬉しさと逢うて別るゝ名殘の涙。一つに落つるッシ三つ瀨川。染地川を隔てて清舟が。最期の觀念悪びれず。燒刄直なる魂の。九寸五分取直し。腹にぐつと突立つる。詞ヤレ暫く引廻すな。覺悟の切腹せく事はない。コリヤ冥土の血脈讀み

さしの無量品。親が讀誦する間。一生の名殘女が面。一目見て何故死なぬ。イヽヤ存じも寄らず。この期に及んで左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ。さりながら。今はの際の御願ひ。私相果てしと聞かば。地義理に繫がれ雛鳥も。共に生害と申すべし。詞さある時は太宰の家も斷絶。暫くの間ながら。切腹の儀はお隱しなされ降參承知致せし體に。後室方へお知らせあらば女も得心仕り。入内致せば彼が爲。地不義の汚名は受けたれども。是ぞ色に迷はぬ潔白。詞ヲヽ出かした能く氣が付いた。年來立てぬく武士の意地。地不和な中程義理深し。命を捨つるは天下の爲。助くるは又家の爲。詞氣づかひせずと最期を清う花は三吉野侍の。手本になれと潔く。地いへど心の。亂れ咲きあたら櫻の若者を。ちらす惜しさと不便さと小枝に注ぐ血の涙ッシ落ちて。波間に流れ行く。奉地それとも知らず悅ぶ雛鳥。詞アレ〳〵花が流るゝは嬉しや久我様のお身に恙のないしるし。地私は冥土へ參じます。千年も萬年も。御無事で長生遊ばして。未來で添うて下さんせと心でいふが暇乞。詞思ひ置く事。言ひ置く事もう何にもござんせぬ。片時も早うサア母様。切つて〳〵と身を惜まぬ。地我が子の覺悟に勵まされ。胸を定めて取上ぐれど。刀は鞘に錆付く如く。離れ兼ねたる血筋の繩。今切殺す雛鳥を。無事と知らする返事の櫻ッシ同じく川に浮ぶれば。染詞ハアア嬉しや。是ぞ雛鳥が入内の知らせ。久我之助が心の安堵。采女の方の御所在は最前申上ぐる通り。此世に心殘りなし。御苦勞ながら御介錯。奉サア〳〵母様切つていの。未練にござんす母様と泣かぬ顏するいぢらしさ。地刀持つ手も大磐石。染思ひは同じ大判事。子よりも親の四苦八苦。奉命もちり〴〵。染日もちり〴〵。奉詞ハア左様ぢや。早や西に入る日輪は娘がお迎ひ。彌陀の來迎。西方淨土へ導き給へ。地南無阿彌陀佛と眼を閉ぢて。思ひ切つたる首諸共わつと泣聲答ゆる谺。染肝に徹して大判事。刀からりと落ちたる障子。詞ヤア雛鳥が首討つたか。奉久我殿は腹切つてか。染地ハアなしたりとどうど坐し。奉悔むも泣くも一時にスエテ呆れて詞も染なかりしが。奉地やゝありて定香聲を上げ。詞入鹿大臣へ差上ぐる雛鳥が首。御檢使受取り下されと。染地呼ばはる聲を吹送る。風の案内に大判事オクヲ歎きの。姿改めて。衣紋繕ひしづ〳〵とおり立つ奉川邊の柳腰。娘の首をかき抱き。詞大判事様わけては何にも申しませぬ。御子息の命はどうぞと思うた甲斐もない。あへない有様。お前様のお心も推量致し居りまする。地添ふに添はれぬ悪緣を。

思ひ合うたが互の因果。此方の娘も添ひたい〳〵と思ひ死。詞餘り不便に存じます。せめて久我之助殿の息ある中に此首を其方へお渡し申すが。娘を嫁入りさす心。染實に尤も嫁は大和地婿は紀伊國。妹脊の山の中に落つる。吉野の川の水盃。櫻のはやしの大島臺。目出たう祝言さしませうわい。奉そんなら是迄の心も解けて。染ハテ互に姻同士。エ、忝いと。地悅ぶも跡の祭。詞ほんに脊丈延びた者を。何時迄も子供のやうに。思うて暮すは親の習ひ。地あまやかした雛の道具。一人子を殺して何にせう。跡に置く程涙の種。詞腰元ども其一式。殘らず川へ流れ灌頂。フシ未來へ送る。嫁入道具行器。長持犬張子。ヤ、キ小袖箪笥の幾棹も。命ながらへ居るならば。一世一度の贈り物。五町七町續く程。美々しうせんと樂みに。思うた事はナホス引きかへて。フシ水になつた

る水葬禮。ヤ、キ大名の子の嫁入に。乘物さへもなか〳〵に。紀念も仇の爪琴に。首取乘する弘誓の船。アシオクリ あなたの岸より。染地彼の岸に流るゝ。フシ血汐清舟が。地今はの容顏見る親の。口に祝言心の唱名。詞千秋萬歳の千箱の地玉の緒も切れて。今は敢なき此死齶。生きて居る中此樣に。婿よ嫁よと言ふならば。いか計り悅ばんに。領分の遺恨より。意地に意地を立通す。其上重なる入鹿の疑ひ中直るにも直られぬ。義理になつたが二人が不運。詞あれ程思ひ詰めた嫁。何の入鹿に從はう。とても死なねばならぬ子供。一時に殺したは。未來で早う添はしてやりたさ。地言合さねど後室にも是迄不和な大判事を。姻と思召せばこそ。悴に立てて一人の娘。ヲ、よくこそ手にかけられし。過分に存ずるフシ定香殿。奉詞アヽ勿體ない。其お禮はあちらこちら。不束

な娘故。大事のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御。夫に持つた果報者。地とはいひながら。あれ程迄手しほにかけて育てた子を。又手に掛けて切る心。染詞サヽ推量致してをる。武士の覺悟は常ながら。まさかの時は取亂し。介錯仕後れ面目ない。奉地いえ〳〵それで目出たい此祝言。是がほんの葬よ嫁入。一代一度の祝言に。婿殿の無紋の上下。詞首ばかりの嫁御賽に。對面せうとはしらなんだ。奉地それも子供が遁れぬ壽命。染兎にも角にも世の中の子といふ文字に死の聲の。二人有るも定まる宿業と。隔つる心親々の積る思ひの山々は。染とけて流れて奉吉野川フシいとど。染漲るばかりなり。地涙はらうて大判事首かき上げて聲高く。詞悴清舟承れ。人間最期の一念によつて輪廻の生を引くとかや。地忠義に死する汝が魂魄。君父の影身に付添うて。朝敵退治の勝軍

を草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥と改めて親がゆるして盞未來。五百生まで變らぬ夫婦。忠臣貞女の操を立て死したるものと高聲に。閻魔の廳を名乘つて通れ南無成佛得脫と。唱ふる聲の聞えてや物得言はねど合す手を。合せ兼ねたる此世の別れ。早や日も暮れて人顏も。見えず庵の霧隱れ。春埋む娘の亡骸は此方の山にとゞまれど。染首は脊山に檢使の役目。春我が子の介錯淚の雜。よしや世の中憂き事は。何時か當麻の。染大和路や。春三。ヨ食。春跡に妹山。染先だつ脊山。二人恩愛義理を堰下す。染淚の川瀨。春三吉野の花を。染見捨てて。春出でて行く

第四

詞引いたり。ヲ、。引いたり。ヲツト地文月七日例年の。水を新井に繰返す釣瓶の綱も ッシ三輪の里。地酒商賣の世杉屋が身過ぎの水の內井戸をわけて。祝ひの賑はしき。サア〳〵濟んだと取り〳〵に。御酒洗米供物。ッシ皆々汗を入れにける。地主の母は納戸より運ぶ用意の酒肴。いつにないほや〳〵機嫌。詞近所の衆どなたも大儀でござんした。嘉例の通り酒盛して。暮れるまでゆつくりと遊んでいんで下さんせ。コレ土左衞門さん。年かさにお前から酒始めて下さんせ。ア、又雜作な止しにさんせいで。おいらが相借屋で手傳ふのも。年中爰の井戸の水を使ふ恩返し。なう五洲兵衞左樣ちやないか。ヲ、さうとも〳〵。氣をはつて貰ろて術ない。是からはいつもの通り。賑かに遊びましよ。サア野平藤六。騷ごぞや〳〵。ホンニそれは左樣と。コレ內儀さん。見れば爰にも寺屋の樣に。七夕樣が祭つてあるな。サイノマア見て下さんせ。愛たてないと思はんしよが。こちらの娘のアノお三輪。何やら星樣に願があるとて。あの樣に內で祭も色々の供へ物。ませた世界ぢやないかいな。ホ、そりやマア奇特なこつちや。そして此お娘は留守かえ。アイ小さい時行た寺小屋へ。七夕に呼ばれました。サア〳〵一つ飲んで下さんせ。ヤイ子太郎。酌をしをらぬか。どりや吸物に豆腐でも。地たいて來ましよと母親は。ッシ納戸に入れば打ちくつろぎ廻る。盃底なしども。引受け〳〵。いつき飲み。肴の鉢を。引寄せて箸放さず。ッシカ・リ減多喰ひ。丁稚の子太郎。ッシ呆れ顏。詞ア、扨々。氣味のよいとは挨拶ぢや。よつ程下作な呑み樣ぢや。井戸の鮒が水呑む樣に。口明いてがつぷ〳〵。エ、夫では味が知れ難かろ。コレ此酒は內儀樣が張り込んで。こちの銘酒の第一番。男山といふ酒ぢやが。こなた樣達は眞の無茶飲。此銚子の代りめから。もう鬼殺しにしてくれろ。

そしてまあよい加減に酒飲まんしたら。例の通り騒ごかい。こちのお三輪様の三味線と。太鼓も借つて來て置いた。地おつと合點と口利の。土左衛門が眉に皺。詞それはさうぢやが。北隣へ近頃來た相借屋の烏帽子折。此井戸がへにも立合はず。餘りなめた奴ぢやないか。野平なんと思やるぞ。ソレ〳〵なまじらけた顏付で。馬鹿慇懃な顏付き。平生ぬかす挨拶も仔細らしい切口上。毛唐人のやうな奴。大かたそれ今流行る。早學文といふ本を見て。唐の狛め句をしをるのぢや。地此井戸がへに出合ぬからは。急度物いひ付けてやろと。借屋の內の神樣達。ヲシ御託宣もとり〴〵に。地それとも知らずのつし〳〵。歸る隣の烏帽子折。辛き世渡り甘口に羊羹色の黑小袖。一腰指したとりなりに。ヲシ浪人とこそ知られける。地門口より腰かゞめ。詞隣家にをります其原求馬でござります。お屋敷方の用事に付き。未明より罷出で只今歸宿仕る。後室樣にはいよ〳〵御機嫌うるはしうござりませう。後刻綏りと御意得ませうと。地我が家へ入るを惣々が。詞ア、これ〳〵。マアア待たんせ。けふはコレ爰の井戸がへ。相借屋が寄つて居るのに。こな樣ばかり來ずに居て交際が濟むのかい。但しおいらを。潰すのかと。地ねだり臺詞に求馬は悔り上り口に兩手をつき。詞是は〳〵お顏を見れば皆合壁のお方々。この井戸がへお手傳ひ。曾以て私存ぜず。地是と申すも不案內から先格の作法を存ぜず。段段の失禮眞平御赦免下されと。スエ疊に額すり付ける。詞ア、これ〳〵。又仔細らしい事いはんすかいの。ハ、勝手を知らにやしよ事がない。了簡せいなら夫で濟む。此方も一番いうた跡は。モウいさこさはないわいの。此土左衛門が呑込んだ〳〵。地然らば貴方樣がお執成で。斯樣に御教訓なされた上は。其いさこさとやら申す。御遺恨はござりませぬか。詞サアもうよい。言はんすな。扨おいらは餘程醉うて居る。是からは嘉例の騒ぎぢや。調子が合はいで面白ない。此石できゆつとやらんせ。ハ、忝うはござりますが私。一滴もたべませぬ。ヲツトそしたら勝手次第。サア是からが騒ぎの趣向。此土左衛門に烏帽子屋殿。五洲兵衛に丁稚の子太郎。しめて四人の大踊。三味線太鼓は。野平藤六よいか〳〵。求馬樣も合點か。スリヤ私にも其踊を。ヲイノこな樣は此貸屋での新面。猶踊らにやならぬわい。音頭もおれが二役ぢや。音頭ヤア千代の始めの一踊。先づは松坂こえたえ。松坂こえたやつさ。踊はありや〳〵ハツハヨイヤサ。地烏帽子屋殿はもぢ〳〵と。手持不沙汰に揉烏帽子。ヤツトサ。爰の娘

の柳さび引き立烏帽子と折りかけた。ヤツトサ。風折烏帽子見すまして帆懸烏帽子と歸らるゝ。ヤツトサ。ナホス地家主もぎ兵衛ッシいつきせき。詞いかに嘉例の祝でも。あんまり騷ぎがかさ高なと。地門口から聲高々。昔頃喚いてはいれどいかな事。ッシ耳へも入れずヤツトサ。ヤツトサ。もぎ兵衛叶はずともゝ〳〵に。呵る詞も拍子づき。ヤツトサ。詞ヒャウシ此家主をそでにして。酒を飲めとも言はゞこそ。ヤツトサ。おのれ等許り飲喰ひ。近所を構はぬ大騒ぎ。ヤツトサ。是程いうても聞入れにや。家明付けるが合點か。ヲヽサテ合點ぢや。地是を來て見よかしのえ。お家主渡したと。踊る拍子の醉機嫌。夢中になつて立歸る。家主跡に。とぼんとなり。詞アヽやくたいもないやつら。とう〳〵おれ迄夢中にした。婆樣内にか。逢ひたいとッシいふ聲聞いて納戸より。詞ヲヽ是はマアお家主樣かヤイ子太郎め。あなたがお出なされたら。何故おれに知らせをらぬ。ナアニ言はんすやら。あのお家主樣も。いんま迄同じ樣に踊つてであつた物。又つけ〳〵と何いひをる。サア〳〵申し。なんぞ御用でござりますか。ヲヽ用とも〳〵大事の用。さるお侍から賴まれたが。入鹿樣の言付で。ソレ鎌足といふ和郎の子息の淡海。方々流浪して居るげな。それを見付け出したら大金。何でもマア此方へどされ。とつくりと言うて聞かそ。サアちやつと〳〵〳〵。ハイ〳〵〳〵そしたらお前へ參りましよ。ヤイ〳〵〳〵子太郎よ。サア鬧がしうなつて來た。もう日が暮れたさうな。火も消して見世明けい。用心に氣を付けい。又此娘は寺屋から戻りが遲い。ソレ酒買が來たら擲出せ。盜人が來たら酒はかつてやりをれと。地氣の急く儘に間違ひだらけ。オクリ打連れへてこそ出でて行く。地日と共に營む樣も入相の。本ッシ四方の市庫戸鎖し時。地子太郎跡を打見やり。灯を上げ表の戸夜の構へのそこゝと。ッシこなたの道より。歩みよる振の袖の香やごとなき。面を隱す衣被き。ッシ誰白絹の優姿。地窺ふ内に隣の軒。知らせのしはぶき主の求馬。詞今宵はどうして早かりし。地サア〳〵此方へと其跡は。言はず語らず手を取つて。ッシ戸口立寄せ入る跡に。地子太郎は不審顔。隣の門口耳をあて。聞き濟して立戻り。詞なんでも隣の烏帽子奴は。おれと違うてよつ程豪い色事師ぢやわい。彼奴が見事な烏帽子で。アノ代物占めをると聞えた。こちらのお娘に聞せたら。大抵のことぢやあるまい。ヱヽはし早い奴ではあると。ッシ呟く所へ。地娘のお三輪。寺子屋戻り。早足に。ッシ門口這入れば。詞やお三輪さん戻らんし

たか。サア〳〵事ぢや〳〵〳〵大事ぢや〳〵。ヲヽあの人わいの何ぢやいの私に恟りさしやつたわいの。さしやつたわいの。さしやつたわいの所かいの。コレお前に忠義をいうて聞かす。忠義とは何の事ぢやいの。エヽ忠義とは忠臣の事ぢやわいの。サ其忠臣は知つてゐるがの。夫がどうぞしたかや。サ其忠臣はの。アノ隣の烏帽子奴がな。隣の烏帽子とは。ムヽ求馬様のことかいの。ヲヽ求馬々々。其求馬の姿から起つた事。こちの内儀様は家主殿へ用があつていかしやつた。其跡へ何ぢやか知らぬが。眞白な絹をかつぎ。幽靈かと思うたら。美しい衒妻が隣の門口こと〳〵と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て。よう早う來たナアと。手に手を取つて内へはいつた。それからおれがぢつとして聞いて居たら。コレこちへ雇ふ男どもが。朝の間に酒桶洗ふ様に。シイ〳〵といふ音がした。どうでもありや求馬様が。竹箒で擦ると見えるわいな。ナントお三輪様。コリヤだまつて居られまいがな。ムヽそんなら何といやる。求馬様の所へ美しい女中様が見えて。其女中様を。連立つてはいらしやんしたと言やるのか。アイ。そりやマア合點のいかぬ事。幸ひかゝ様も留守なれば。其方往て求馬様を。爰へ連れて戻つてたも。ヲツト合點呑込んだと。地走り出でて隣りの門。破れるばかりに打敲き。詞コレ求馬様隣の酒屋から使に來た今のが濟んだら印判持つてごさんせと。フシ口から出次第。地求馬は恟り何やらんと。立出づれば物をもいはず。マア〳〵此方へと無理やりに手を引連れて。フシ我が家の内。地夫と見るより娘のお三輪。口にいはねど赤らむ顏。詞求馬様お歸りなされたか。ホ是は〳〵お三輪様。寺屋へお出なさつたげなと。地互に味な墨付きを。子太郎がひつ取つて。詞サアおれが役はもう是迄。そこへ何かの立引さんせ。地爰らで我ら粹を通し夜食の扶持にありつかう。詞兩人共後に逢はうと。地納戸へ。フシ走り入りにける。地跡に二人はつぎほなくおぼこ育ちの娘氣に思ひ詰めたる一筋を。言はうとすれば。胸迫り。詞今子太郎に聞いたれば美しい女中様が。宵からお前へ來てぢやげな。定めてそれは隱し妻。地是迄お前とわたしが中逢ふ事さへもたま〳〵に。千年も萬年も變らぬ契りと仰しやつた。其約束は僞りか。浮世の譯も辨へぬ。在所育ちのわたしでも。いひかはした事忘れはせぬ。あんまりむごいと。取付いて涙先立つ フシ恨言。詞是は思ひも寄らぬ疑ひ。成程女中は來て居るが。あれはソレ春日の神子殿。其連合の禰宜殿の。烏帽子を誂へに見えたのぢや。美

女はおろか。いかな天女か影向あつても。外へ散る心はない。和歌三神を誓にかけ。偽りは申さぬと。ヲシ時の間に合ひ落付かせば。地さすがおぼこの解けやすく神様迄誓言に。夫でわたしも落付いた必ず變つて下さんすなと。立上つて七夕に供へ祭りし二つの緒環。持出でて前に置き。詞わたしが寺屋へ往た時に。お師匠様に聞いて置いた。殿御の心の變らぬ様に。星様を祈るには。白い糸赤い糸。地緒環に針を付け結び合せて祭るとやら。詞ヲヲそれが則ち願ひの糸の乞巧針。ム、お前も能う知つてぢやナア。白い糸は殿御と定め。女子の方は赤い糸。地それで私も此願籠。寺屋で見た本の中に心をかけし女の歌。詞ア、何とやら。ヲ、それよ。戀渡る。思ひはちゞに結ばれて。幾代願ひの糸の緒環。ホ、其男の返しには。逢見ての。後も願ひの糸筋を。地よそへ亂すな君が緒環。詞アイ〳〵さうでござんした。何時までも變らぬしるし。赤い糸をお前に渡し。白い糸を私が持ち。地契りも長き願ひの糸。夫婦の約束星合に。鵲ならぬヲシ緒環を。千代の媒介取りかはし肌に付き合ふ。ヲシわりなき縁。地求馬が内より以前の女。歩み出でてこなたの門口。詞隣の烏帽子折様は。こなたへ來てござるかな。許さつしやれと内へ入る。地姿に求馬は手持不沙汰。お三輪は何の氣も付かず。詞ア、彼方が今のお人かえ。ヲイノ。あれ〳〵神子様ぢや。そ

れで薄衣着てござるナア申し。お前様はアノお連合様の。烏帽子を誘にお出でたされましたのちやナア。左様でござりませうがな。サ、、、さうでござりますと。ッシ紛らかす。地包む詞の絹を漏る月の笑顔をぴんとすね。詞コレ申し求馬様。アノ女中はお下婢か。何人でござります。アイヤ是は此酒屋の娘御。ム、其マア隣の娘御と。最前から久しい間。何の用がござりましたと。地問はれて求馬は答へもなくうぢつく素振見て取るお三輪。詞ア、申しコレ神子様とやらいふ女中様。人をマアお下婢かの何のと。ひつこなしたものの冒ひ様。求馬様にはアイ。私が用がたあんとござんす。お前のお世話になるまいし。構うて下さんすな。ヲ、是ははしたない。其様に言はしやつても。そもじなどの用を聞く。求馬様ぢやないわいなう。地サアお歸りと手を取れば。お三輪が隔てて。詞イエ〳〵。わたしが未だ用がある。往なす事はなりませぬ。イヤこゝには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しやと。地手を引立てて立出づれば。イヤ放さじとお三輪もまた。あなたへ引けばこなたへ引く。譯も渚に戯れる雁。翅振袖ふり分け姿。ッシ戀を爭ふ其折から。地いきせき戻る此家の母。詞ヤア求馬殿。此方様には用がある。何慮へも遣る事ならぬ。地動くまいぞと身構へに。何かは知らず白絹の姫は。外へと出行くを。とめる求馬に又すがる。娘を押分け母親は求馬やらじと引止め。繋ぐ手と手を柵のッシ風に揉まるゝ爭ひに。地子太郎立出で見廻して。これ幸ひと母親の帶に確り括つたる。縄先を桶の呑口に結付け納戸へ逃げて入る。此方は互に戀慕ひ姿亂るゝ。姫百合の手を振りきれば一時に亂れて走るを母親が。遣らじと追へば繋ぎ縄。力む拍子に呑口拔け酒は瀧津瀬悔り敗亡。三人門へ遲れじと同じ。思ひを跡や先道を。したうて 三原

道行戀のをだまき

表具 岩戸隱れし神様は。誰と寢して常闇のよる。〳〵毎に通ひては。又歸るさの。ナホス道もせ氣もせ夫も何故スエカリ戀故に。ッシ寢るゝ所體。恥かしと。佛隣す薄衣に。ギン包めどかをり橘姫。オクリ思はぬ人を思ひ侘び心のたけをくどけども。長地つれなき松の下紅葉焦れて絶えん玉の緒も殿故ならば捨草も。暫しは憩ふ芝村のギン賤の男が。歌置き手拭で。忍び〳〵の出逢妻畷にござらばナコレ。のんやほんにさ。背戸の柿の木の。枝こえてナホス連理を契る言の葉は。ッシそれも戀中妻は又。箸中村よ一森の長者が跡と名に響く。釜が口をも出離れて。ッシオクリ歩むに。〈暗

き吳竹のッシ茂れる中を 冷泉分行けば。葉毎の露が。ほろ〳〵とほろゝ打つなる雉の聲。思ひ比べていとゞ猶。心細野に立ちつくす憎や。案山子に威さるゝ 我が。姿に又怯ぢてはつと立行く羽風につれて。ちり〳〵ちるや。柳本流るゝ水に裾ぬれて。ホッシ物思へとや帶とけの。スエテ里美し自らは。終に一度の。情さへないて。身を知る。 合涙雨。タ、キ布留の社の御燈の影か。 ナホスフシ松の木の間にちら〳〵〳〵とハズミ見えつ隱れつ。歸るさの 和跡を求馬が慕ひ來て。 掲和互にはたと行合の星の光に顏と顏。 掲ヤア戀人か何故に。爰迄跡を追ひ鳥は。もしや塒の契りをも。叶へてやろとのお心かと。胸にはいへど詞にはおもはゆふりの袖几帳。 和成程切なる心さし仇に思はじさり乍ら。左樣こがるゝ戀路にて畫をば何と。烏羽玉の夜ばかりなる通ひ路は。いと不審なり名所を聞いたる上はこなたより。二世の固めは願ふ事。明させ給へと只管に。 掲問はれて實にもはづかしのもりて。あまれる。浮身の上。語るにつらき葛城の峰の白雲あるぞとも。さだかならざる賤の女と思うて深い疑ひの。雲をはらして自らが。思ひもはらして給はらばどんな仰も背くまい。縱へ草葉の露霜と消えても。何の厭やせぬ。是程思ふに胴慾な。とけぬお前のお心はあんまり結ぶの神樣を。祈り過した咎かや。つれなのッシ君やと恨みわび。 春思ひ亂るる。薄蔭夫とお三輪は走り寄り。中を隔てて立つ柳。 和立退く袂。 春引止めエ、聞えませぬ求馬樣。ソリヤ氣の多い。惡性なそもや二人が馴初は。始めて三輪の過ぎし夜に。葉越の月の俤は。お公家樣やら。侍樣やら。知れぬなりふりすつきりと。水際の立つ好い男。外の女子は禁制と。しめて固めし肌と肌。主ある人をば大膽な。斷なしに惚れるとはどんな本にもありやせまい。 合上カン女庭訓躾方。よう見やしやんせ。エ。窘みなされ女中樣。 掲イヤ。そもじとてたらちねのゆるせし中でもないからは。戀は仕勝よ我

が殿御。春イヽヤわたしが。梶イヤわしがと二人共にすがりつ。手を取つて三人 三下リ 歌園に色よく咲く草時は。フシ男女になぞらへ言はば。言はれう物か夕顔の。合梅は武士。櫻は公家よ。山吹は傾城。合杜若は女房よ。色は似たりや。菖蒲は妾。牡丹は。奥方よ。桐は御しゆでん姫百合は。娘盛りと撫子の。ナルソエ〳〵。なるとならずと ナホスフシ 奈良坂や。此手柏の二人の女。春睨めば。梶睨む荻と萩。和中に揉まるゝ男郎花。放ちはやらじと縋り付き。梶こなたが引けば。春あなたが止め。二人戀の柵。蔦葛。付き纏はれてくる〳〵。三人 上ギン 廻るや三つの小車の花より白む横雲の。たなびき渡りあり〳〵と。三笠の山も程近く。梶鳴る鐘の音に驚く姫。和歸る所は何處ぞと求馬が氣轉振袖の。はしに縫ふてふ取交す。春緣の緒環いとしさの。あきりて三輪も啓氣の針。男の裾に付くるとも。三人しらず印の糸筋をしたひ慕うて三重

地榮ゆる花も時しあれば末枯嵐のあるぞとは。いさ白雲の高御座。新に造る玉殿は。彼の唐國の阿房殿。爰に移して三笠山。月も入鹿が威光には。フシ覆はれますぞ是非なけれ。地腋門の方より宮越玄蕃荒卷彌藤次。御前よき儘高う吹く。フシ帆かけ烏帽子も十分に。仰反り返り入來り。詞ホウ仕丁ども朝清めな。イヤなに玄蕃殿。此度新たに築かれたる此山御殿。朝日に輝く所は。吉野龍田の

花紅葉。一度に見るとも及びますまい。ナニサ〳〵。イヤモ言語に述べがたき御物好。瑪瑙の梁珊瑚の柱。水晶の御簾瑠璃の障子。コレ見られよ。飛石は琥珀砂は金銀。又釣殿に登り見おろせば。春日の杉も前栽の草びら。若草山葛籠山は撒石同然。猿澤の池は。お庭の井戸に見えまするとの。地話の尾に付く仕丁ども。詞アヽ結構な御普請でござります。さうして何やらふつ〳〵と好い匂ひが致します。ヲヽ其筈縁板檻に至る迄皆伽羅と沈。シタリ抹香や鉛屑とは違うた物ちやなう又次。サイ。又お學問所は唐を寫して唐木ぢやげなの。ハアン。其唐木とは何々ぞ。ヲヽ先づ花梨。フン。紫檀。フン。黒檀。ホイ。鐵刀木。ホイ。うちやさん。ホイ。當卦本卦。や手の筋。や。男女相姓や墨色の考。コレ〳〵。失せ物待ち人。コレ〳〵〳〵。書判の善惡。アアコレ〳〵。そりや山御殿ではなうて山伏ぢやぞや。サア王樣も此山で寢やしやるによつて山伏ぢや。エヽ人を嘲弄するかな。イヤ長老とは坊主の事か。イヽヤ女子の事ぢや。そりや女郎ぢや。イヤ如露とは花に水かける物ぢや。エヽどう言やかう言ふと。なんぼ貴樣がくずなの辯でもおれにや敵はぬ。ヤイふるなの辯ぢや。くずなとは魚ぢやわやい。イヤくずなぢや。イヤふるなぢや。くずなぢや。ふるなぢや。〳〵。〳〵。ヤイヤイ騒がしいそりや何事。清め仕舞はば早く下れ。皆行け〳〵と。地追立てやり。詞アレお聞きあれ彌藤次殿。我が君此殿へ御移りと見え。物の音近く聞え申す。いかさま左樣と威儀つくろひ嚴重オロシへにこそ。控へ居る。地花に暮し月に明し。酒池の遊びに醉ひつかれ。御殿々々の通ひ路も。數多の官女が遊樂に。君の機嫌を鳥甲。下オン調ぶる笛や簫箏篥ギン太皷の。音も鷄德に。己が不德を押登る。繽紛の深綠蜀錦の褥の上。むんずと坐せし有樣は。實に類なき榮華の殿。玄蕃彌藤次頭をさげ。先達て卿上饗客達より。君の壽を祝し申されし數の島臺。ソレ女中方。叡覽に供へられよ。地アツト答へて持出づる思ひ〳〵の飾物。何がな君が壽を祝ふ。鶴龜松竹の。影は千尋の深綠。松と鶴合せて見れば。一萬二千の齡を君に。讓り壽く。フシ蓬萊山。扨又次の島臺は。周の帝の寵妃。假の情の弟草實に寵愛の色菊や葉毎を染めし其筆の。命毛長き八百歳老いせぬや。〳〵葉の名をも菊の酒。酌めども盡きぬ泉の壺。ナホス殿上人の方々より フシ御祝儀なりと相述ぶる。地一入興に入鹿が悦び。詞ヲヽ百司百官より。下萬民に至る迄。我が在位長かれと願ふ事銘々が身の冥加なれば。猶

萬歳を唱へよと高慢我慢の詔。地はつと兩人階下に平伏し。詞我々は申すに及ばず民百姓も野に手を拍つて舞ひ樂む。誠に戸ささぬ御代と申すは今此時に候と。地減多に追從猥々の。人形に見惚れ官女達。詞コレ〳〵此猥々が手に持つた。酌盃も取りはづし壺には誠の造酒を湛へた是で御酒宴始めうか。いか樣夫は能い御慰みサア〳〵地早うと取り〳〵に手まづ廻る盃の ギンオクリ 廻れや。廻れや萬代も盡きじナオス盡せぬ。歡樂の興を催す 三重其所へ。詞ものまう賴みませうとどつてう聲。撥鬢頭の大男。御殿間近くぼつか〳〵〳〵。着たる木綿の長袴。糊しやきばつて立ちはだかり。詞エ、入鹿殿は爰ぢやな。内になら逢はして下んせと木で鼻くゝるむくつけ詞。宮越荒卷目に角立て。詞ヤア何奴なれば。君の御前とも憚らぬ馬鹿者め退去りをらうときめ付くる。イヤ俺や。難波の浦の鰻七といふ網引でどんすが。何時やらから此方の方へ。宿替してどんしたお公家殿鎌きりの大身から。雇はれて來た使でどんすと地いぬを遙に見下す入鹿。ハテ心得ぬ其鎌足めは首陽山の昔を學び跡を隱せしと聞きしに。扨は難波の浦に在りけるよな。普天の下。率土の濱。王地にあらざる所なければ今日迄飢にも臨まず健固にをりしは我が惠ならずや。夫を思はゞ疾にも參り恩を謝すべきの所。使を立てしは緩怠なり。エ、それおれが知つた事かいの。斯う見た所が。餘程短氣者ぢやわいの併し喧嘩はこなんの樣にこつきで行くのが德ぢや。鎌殿も一旦は言ひがゝりて。てつぱつて見ようと思はれたさうなが叶はぬやら。どうぞ俺に往て挨拶してくれてて。夫は〳〵きつい弱りいの。大概な事ならもう料簡してやらんせ慧な中は得て心安立て。間違がある物ぢやてなう。コレ中直りの印ぢやてて。ます一升おこされたと地刀の提緒にフシぶら〳〵と結びし德利急度目を付け。地未だ日本に渡らぬ兵器唐土にありと聞く飛道具の類なるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。かた〳〵油斷致すなと肩を撃めて。身構へたり。詞エ、とつけもない。とつくりと見やんせ酒ぢや〳〵。コレ其處なお手代衆早うコレそれ進ぜさんせ。イヽヤ善惡しれざる鎌足より差上げし酒ならば。毒藥仕込みあらんもしれず幸る事罷りならぬ。エ、まはすわ〳〵。どれおれが毒味してやろ茶碗はないかえ。そんなら赦さんせ直やりぢやと。地言ひつゝ德利のフシ口から口詞ヲヽよい酒ぢやになあ是を飲まぬといふ事が地あるかしらぬと振つて見て。詞ヤヽヤア南無三。皆飲んでしもた。エ、ひよんな事してのけた。ヤコレひ

よつと鎌殿に逢はんしよと儘おれが飲んだと云はずに。よう居いたと禮いうて下んせやと。地我武者な樣でも正直者。ッシ眞面目になつて氣の毒顏。詞アヽまだ何やら言傳つて來たが落しはせぬかと懷探し。ヲツトあるわサア是見やんせと一通を。地渡せば彌藤次押し披き。詞ナニナニ我不肖たるによつて。暫く心を惑はすと雖も。今一天四海御手の內に落入る事正しく天の讓り給ふ萬乘の御位。入鹿公に背くは天に背くと同じと。先非を悔いて爰に降參を乞ふ者なり今より臣下に屬するの印。君の齡を東方朔にたとへ。此桃花酒を以て御壽を祝し奉る。內大臣藤原の鎌足謹んで申すと讀上ぐる。ハヽヽハなまくら者の鎌足め。臣下とならんなんどとは。イヤしら〳〵しき僞り奴。何ぢや鎌殿を嘘つきとは。何ぞ慥な證據がどんすか。ヤア小さかしき證據呼ばはり。彼が心腹いうて聞かさう。ドレ聞きませうか。先づ此入鹿を東方朔に譬へたるが野心の證跡。そりや又なじよに。ヲヽ昔漢の武帝が代に。東方朔といへる奴。三千年に一度實を作る桃を。三度盜んで喰ひし故。九千年の齡を保つ。桃に百の緣をかたどり。百敷百官を手に入れし入鹿を。盜人なりといはぬばかりの底巧み。憎くい奴と居丈高。イヤ〳〵それや無理ぢや〳〵。ヤア蛆虫め。何を知つて小癪奴。イヤ何にも知らんけど。代りになつて來た俺ぢやによつて一番いふのぢや。ヲヽ鎌足が代りならば。是をも代りに試みよと。地傍なる島臺押取つて眉間へはつしと打付くる。臺は微塵に飛散れどびくとも動かず。詞アヽ好い加減にだゝけさしやれ。其厄拂ひの代物。東方朔とやらに譬へたというて業わかすのか。年にあやからんせとこそ書いておこさしやつたれ。盜人と書いちやないぞや。それに其方から色々な講釋を付けて盜人穿鑿。知つた同士はすゞしいとやらで。盜人の覺えがあるかして今の投打。アヽこなんは正直な人さんぢやと世間の噂。見ると聞くとで大きな違ひ。マアそんな盜人と鎌どんを。懇には俺がさすまいわいの。仁體にも似合はぬ事さんすの。よもや左樣ぢやあるまいかの。但し覺えがどんすか。イヤ左樣かいのと。地文盲だらけも理窟は理窟。如何でごはると ッシやり込むれば。地邪智の入鹿も苦笑ひ。詞ハテ口がしこく言ひ曲げしな。うい奴でかした。其褒美には。鎌足が實否を正す迄汝は人質。最早籠中の鳥同然。歸る事はならぬと思へ。ヤア〳〵玄番彌藤次いざ萩殿にて天盃を廻らさん。地來れやつと引連れて ッシ帳臺深く入りにけり。詞アヽコレ〳〵おれを質に取らしやると。着物

や道具と違うて。代物が飯喰ふぞや。併しあの業腹では。大抵で喰はしをるまい。ヲ、。空腹に今の酒でよつ程醉が來たわい。ドリヤ何處でなと一寢入り。やつてこまそとフシ伸上り。詞エ、腰が重い筈よ此大小。らつしもない物差さしておこして。地あた面倒なと緣板へ。ぐわたりと鳴るは相闘かと。突出す鎗は篠薄。構はず轉り。胃枕不敵なりける。フシ男なり。ハルフシ御所より外へ。唉出でぬ若き御達が入りかはり男。小オクリ見に來る愛想には。お茶よお菓子よ煙草盆。銚子土器持つて出で。詞コレそな人は何御用で。お召寄りありしはしらねど。地嘸待久しう氣もつきよう。九献一つと フシ差置けば。地體寢返り腹這に。頬杖つく〳〵打眺め。詞フン貴様達は誰ぢや。ヲ、。我々は上様の。詞身近く召さるゝ女ども。何ぢや短い女子ぢや。ドレ〳〵。成程どれもこれも能う煮え込んだ者ぢや。わいらは爰な飯焚ぢやな。テモ希有な前垂してゐるな。エ、地つがもないさればみ事。わしらを問ひやる其方の名は。詞ヲ、鰻。何鰻とは。ハテ商賣の夜網に出りや。沖でも磯でも行當りに。よう寢る故に鰻七といふ。漁師々々。ヤア料紙とは。何ぞ書いてたもるのか。地それならば必ず繪や歌はいやぢやぞや。今雛波津で持囃す。地カヽリ歌舞伎芝居の其中でも。よう聞及んだ文七や。八藏の紋ならばフシ書いて欲しいとしどもなき。地櫻の局摺り寄つて。詞さうして下々は。皆其方の様な男かや。能い男もたんとあるであろ。地地下の女子は羨しい。芝居は見次第好い男は持次第。ほんに又此御所女には何がなる見るも〳〵。冠裝束。窮屈で急な逢瀬の其場でも。衣紋の紐よ。上帶よ。解くかほどくか。大抵では下紐迄は手がとゞかず つい其内には花に風。月に叢雲さはりが出來て。本意ない別れをするわいのといふさへ顏にフシ紅葉の局。詞中將や少將あたりで戀すれば。あの 綉が邪魔になり。尻目づかひは出來ぬ〳〵。其上悋氣口論も。こつちからは桧扇で。地叩けばあつちは笏でとめ。詞つつぱりかへつていきつたばかり。いらうても見ぬ逆ぼこの。零情も受けて見ず。しんき〳〵で暮そより。地いつその事に玉の緒もたえなばたえたがましであろ。もしもや誘ふ水しもあらば。往にたいわいのと鰻七に フシひしと二人は抱き付く。地悔り敗亡業にやし。詞エ、けたいな衒妻奴等。あつちへきり〳〵うせあがれと。地樓もほろゝに言ひちらされ。詞さつてもすげない戀しらず。玉の盃底ぬけ男。地不骨者よと不興して。フシ本意なく奥へ入りにけり。地四邊見廻し長柄の酒。庭の千草にさら〳〵

と漲ぎ。かくれば忽ちに。葉立變してフシ枯萎む。詞ハ、ヽ、ヽフヽ、。最前の鎗といひ。又候や此毒酒。ハレヤレきつい用心と。地猶。打見やる庭先へ弓と矢つがひばら〳〵〳〵。追取りかこませ宮越玄蕃。詞いかにしても心得ぬ面魂。尋ね問ふべき仔細のあれば。引立て來よとの綸言なるぞ。早く參れヲヽ呼びにどんせいでも行くのぢや。假初にもびこ〳〵と。ちよつとでもさはるかいな。腰骨踏折り疝氣の虫と生別さすぞ。ヤコレ家來どもさんわり樣達も其鳥威放すが最期取摑へて首引抜きかたはしからぬたにするぞ。ヤどりやおれから先へ行きやんしよと。地事とも思はぬ大膽者。胸の。強弓矢嵯をオクリ引明けへてこそ入りにける。伊太夫されば戀する身ぞつらや出るも入るも。忍ぶ草。露踏分けて橘姫。スエテすご〳〵歸る對の家の障子にばらり打つ礫。ソリヤ。お歸りの知らせぞと。めい〳〵ヲシ庭に集ひ下り。地枝折開いて入れ參らせおいとしや〳〵御所のお庭の。内さへもつひにお拾ひなされぬに戀なればこそ徒歩跣。さぞ朝露でお裾もぬれん小袿に。召させかへんと立寄つて。詞ヤアお振袖に付いてある此紅の糸不審と。地手繰りたぐればくる〳〵と糸に寄る身はさゝがにの。雲井の庭へ引かれ來る主はゆかしの。ヤアア求馬樣か。ハアはつと驚く姫よりも。騷ぎさゞめく局達。扨も見事引寄せた。七年物の戀人樣か。能うこそお入り遊ばしたサア〳〵此方へと手を取れば。詞イヤ手前はつい道通り。此緒環を拾ひ上ぐるやいな。滅多に引かれ參つた者。何にも存ぜぬお赦しと。地出づる向うを立塞ぎ。エヽ手の悪いなされ樣。わたしらに御遠慮は。内内のお話ならどりやヲシお次へと立つて行く。地姫はとかうの詞なく。スエテ差俯向いて思案の求馬。詞フン此御所の姫とあれば聞くに及ばず。入鹿の妹橘殿と。地言はれてはつと胸せまり入鹿が妹と知り給はゞよもお情はあるまいと。隱し包みし甲斐もなう御存じありしお前こそ。藤原の淡海樣と。言ふ口ちやくと袂に覆ひ。詞女なれど敵方に我が名を知れば一大事。不便なれども助け難し。成程お道理御尤も。生きて居る程思ひの種。お手にかゝるがせめての本望かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が殘る。サア〳〵殺して下さんせと。地双を待つたる覺悟の合掌。詞心底見えた。が誠夫婦となりたくば。一つの功を立てられよ。一つの功を立てよとはえヲヽ入鹿が盜み取つたるこそ。三種の神器の其一つ十握の御劍奪返して渡されなば望の通り二世の契約得心なければ叶はぬ緣。サア是非もなや。悪人にもせよ兄上の。目を掠むるは恩知らず。

地とあつてお望叶へねば夫婦と思ふ義理立たず。恩にも戀は代へられず。戀にも恩は捨てられぬ二つの道にからまれし。此身はいかなる報いぞとスエテ忍び歎いておはせしが。詞ヲヽ、左樣ぢや。親にもせよ兄にもせよ。我が戀人の爲と言ひ第一は天子の爲。命に掛けて仕畢せませうヲヲ出かされたり。シテ又知らせの相圖は何と。今宵御遊の舞に事寄せ。寶劍奪ひお渡し申さん。笛や鼓の音をしるべ奥の亭迄お忍びあれ。然らば我は此所に暮るるをしばし待合さん必ず首尾よう合點でござんす。が若し見付けられ殺されたら。是が此世のお顏の見納め。地たとへ死んでも夫婦ぢやと。おつしやつて下さりませ。詞ヲヽ、運命拙く事顯はれ。その場で空しくなるとても。盡未來際かはらぬ夫婦。エヽ忝い嬉しやと。地抱きしめたる鴛鴦の。つがひし詞緣の綱オタリ引き。ヘわかれてぞ忍ばるゝ。ハルヲシ迷ひはぐれし。かた鶉草の靡くをしるべにて。いきせきお三輪は走り入り。詞エヽ、此緒環の糸めが。切れくさつたばかりで。道からとんと見失なうた。さりながら爰より外に家はなし。大方此内へはいつたに違ひはない。エヽ、誰ぞ來よかし。地問ひたやとヲシ見遣る先より。お下婢が被眉深にしやなと呼びかくれば。ヲツト呑込み早合點。ヲヽ、お清所尋ぬるのなら。其處をこちらへ斯う廻つて。そつちやの方をあちらへ取り。あちらの方をそちらへ取り。右の方へ入つて。左の方を眞直に。脇目もふらずめつたやたらにずつと行きや。イエヽ。私が尋ぬるのは。お清所とやらではござんせぬ。年の頃は二十三四で。色白にくつきりとした。好い男は參りやせなんだかえ。ヲヽ。〳〵〳〵來たげな。〳〵。それはお姫樣の戀男ぢやげなの。三輪の里から跡追うて來た所を。何がお局達が引捕へ。有無を言はせず御寢所へ。地ぐつと押込み上から蒲團をかぶせかけ〳〵ア、〳〵。宵の中内證の御祝言がある筈と。暮れぬ内から騷いでぢや。エヽけなりこちと迄。内太股がぶき〳〵と ヲシ卯月あたりの彈け豆。豆腐の御用が急ぐにと。ヲシ喋り廻つて出でて行く。詞サア〳〵。ひよんな事が出來て來た。ほんに〳〵油斷も隙もなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて。何ぢやいしこらしい内祝言ぢや。餘りな踏付けやう。よい〳〵。其代り何處に居ようと尋ね出し。求馬樣と手を引いて。是見よがしにいんで退けるが腹いせぢやと。地行かんとせしがイヤ〳〵。詞はしたない者ぢやと。ひよつと愛想をつかされたら。と言つて此儘に。地見捨てて是が如何去なれう。

エ、如何せうぞと心も空ッシ登る階長廊下。地行きかう女中見咎めて一人が留むれば二人立ち。三人四人いつの間に。友呼ぶ千鳥むら〳〵と爰かしこから寄りたかり。詞つひ見馴れぬ女子ぢやが。其方はマア誰ぢや。何者ぢや。ハイ〳〵イヤ私は内方の。ヲ、それよ。さつきのお清殿は寺友達。奉公に出られてから。久しう逢はぬなつかしさ。ちよつと見舞に寄りましたら。是はマア〳〵よう來た。上れ茶々呑め。さうして煙草喫め。アノお上には。あた滅相な。御祝言があると。聞けば聞く程涙がこぼれて。あたお目出度い事ぢやげな。ほんに内方の様な能い衆の御祝言は。何の様なものぢやおのれやれ。拜んでなりと腹癒よと。うか〳〵爰迄參りました。何卒お前方のお心で。聟様をちよつと。拜ましてもらうたら。忝う地ござりまするとと言ふ顔も。ッシ恨み色なる紫の。地ゆかりの女と早や悟り。嬲つてやろと目引き袖引き。詞マア〳〵其方は仕合な。斯ういふ折に參り合せ。お座敷拜むといふ事は。女の身では手柄者。したが此方が呑込んで。お座敷へ出すものゝ。何ぞさゝずばなるまいに。何と皆様。いつその事此者に。酌取らそではあるまいか。よからう〳〵。ア、申し。其酌とやらは。ヲ、何の又其方達が知つてよい物か。今爰で教へてやろ。幸ひ爰に御酒宴の銚子島臺。有り合の聟君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。地殘りは介添待女郎と。櫻の局が指圖して。いやがるお三輪に長柄の銚子持たせ持添へ。詞マア盃は三つ重ね。二足。コレ立つのぢや。エ、何ぢやいの。うか〳〵せずと能う覺や。三度目ついで聟君へ。コレ酒がこぼれるわいなう。不調法な。是からが亂酒謠ひ物。地是も嗜なければならぬ。詞サア四海浪なと謠やいの。エ、。エ、とは否か。そんなら聟様拜ます事はマアならぬ。サそれがいやなら早う謠やと。地せつき立てられ是がマア。何と謠千秋萬歳の千箱のナオス地玉

の血の涙スエテ聲詰らせてないじやくり。詞ヲヽめでたう哀れに出來ました。色直しにはんなりと。梅が枝でも蕗組でも。サア〳〵聞きたい所望ぢや〳〵。エヽ。あられもない事おつしやりませ。山家育ちの蠻鶯。地ぼう法華經も片言ばかり。上り下りの仇口や。馬士の唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しなされ。詞サ早う共翌樣に。サア翌樣が見たくば早う謠や。馬士の唄なら面白からう。序に振も立つてしや。否ならこつちもなりませぬ。歸りや 地〳〵と引出され。詞サア〳〵〳〵。何のいやと申しませう。サそんなら謠や。アイ〳〵〳〵。地謠ひますると泣く〳〵もスエカヽリ涙にしぶる振袖は。ギン鞭よ。手綱よ。上タヽキ立上り。馬士唄馬士唄竹にサ。雀はナア。品よくとまるナ。とめてサ。とまらぬナ。色の道かいなアヽヨ。詞エヽ爰な。ほてつ腹めと此樣に。地申しまするとフシ打伏せば。地皆々一度に手を打つて。扨もきつい嗜み事。よい慰で我々が。ほてつ腹までよれました馬士殿大儀と言捨てて。行くを驚きコレ申し。わたしも共にと取り縋れど。ふり放されてがはと轉げ。寢ながら裾にしがみ付き引摺られて聲を上げ。詞なう皆樣お情ない。どうぞ私も御一緒に。連れてござつて下さりませ。地お慈悲〳〵と手を合せ拜み廻るを擲きのけ。ヲしつこ。とても及ばぬ戀爭ひ。お姫樣と張合ふとは。叶はぬ事ぢ

や置いてたも。地大膳女のしつけをせうと。耳を引くやら脇明けより。手を指入れてこそぐるやら抓りつ擲いつ突倒し。詞サア〳〵是で姫様の。悋氣の名代納つた。彌々めでたい御祝言。三國一ぢや聟を取濟したしやん〳〵。地〳〵と濟んだと打笑ひ ッシ局々へ入る跡は。地前後正體泣き倒れ ッシ暫し消入り居たりしが。詞エ、胴慾ぢやわいの〳〵。男は取られ其上に。まだ此樣に恥かゝされ。何と悔さへて居られうぞ。思へば〳〵無情男。憎いは此家の女めに。見かへられたが口惜しいと。地袖も袂も喰裂き〳〵。亂れ心の亂れ髪口に喰ひしめ身を顫はせ。詞エエ妬ましや腹立や。汝おめ〳〵寐ささうかと。地姿心もあら〳〵しくッシ駈行く向うに以前の使者。詞ヲ、其方も邪魔しに出たのぢやな。もう斯うなつたら誰が出ても。構はぬ〳〵そこ退きやと。地袖すり抜けてかけ入る裾。しつかと踏まへコリヤ待て女。詞イヤ待たぬ。笑放しや〳〵〳〵と身をもがく。地髪掴んで氷の刄。脇腹ぐつと差通せば。うんとのつけに倒れ伏す。地刀抜捨て邊を窺ひ目を配る。奥は豐に音樂のッシ調子も。秋の哀れなる。地お三輪はむつくと起返り。詞さては姫が言付けぢやな。エ、むごたらしい。恨はこちからあるものを。却てそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。ヲ、殺さば殺せ一念の。生きかはり死にかはり付纏うて此恨。晴さいで置かうか。地思ひ知れやと奥の方。睨め詰めたる眼尻も。叫ぶ聲音もうはがれてさもいまはしきッシ其有樣。地じろりと見やり。詞女悦べ。それでこそ天晴高家の北の方。命捨てたる故により汝が思ふ御方の手柄となり入鹿を亡す術の一つ。ヲ、出かしたなア。何と賤しい此身を北の方とは。ホ、ウ其方が語らひ申せし方は。忝くも中臣の長男淡海公。エ、。シテ又私が死ぬるのが。いとしいお方の手柄になつて。入鹿を亡す術とはえ。ホ、、其譯語らんよつく聞け。彼が父たる蘇我の蝦夷。齢傾く頃迄も一子なきを憂へ時の博士に占はせ。白き牝鹿の生血を取り母に與へし其驗。健かなる男子出生。鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と號く。さるによつて。彼奴が心をとらかすには。爪黑の鹿の血汐と。疑着の相ある女の生血是を混じて此笛に灌ぎかけて調ぶる時は。地實に秋鹿の妻戀ふ如く。自然と鹿の性質顯はれ。色音を感じて正體なし。詞其虚を計つて寶劍を過なく奪ひ返さん。鎌足公の御計略。物陰より窺ひ見るに。疑着の相ある汝なれば不便ながら手にかけしと。地件の笛の六穴にたばしる血汐受け灌ぎ〳〵。今こそ揃ふ此幻術。此笛こそは入鹿を挫ぐ火串な

らん。ハヽ、有難やと押戴き。いさみ立つたる其骨柄。げに藤原の御内にて金輪五郎今國と鍛へに鍛へし ッシ忠臣なり。詞なう冥加なや。勿體なや。いかなる縁で賤の女が。左樣したお方と暫しでも。枕かはした身の果報あなたのお爲になる事なら。死んでも嬉しい忝い。地とはいふものの今一度。どうぞお顔が拜みたい。たとへ此世は緣薄くと。未來は添うて給はれと這廻る手に緒環の。此主樣には逢はれぬか。どうぞ尋ねて求馬樣。もう目が見えぬ。なつかしい。戀し地〳〵といひ死に。思ひの玉の糸切れし。緒環塚と今の世迄鳴響きたる横笛堂の。因緣かくとッシ哀れなり。今國不便彌增にせめて葬り得させんと。背にお三輪が亡骸を。追々馳來る荒しこども。曲者やらぬと取卷いたり。見向もやらず悠々とオクリ几帳の。綾絹引きちぎり。死骸と共に我が五體くる〳〵しつかと引結び。詞死人を取置く我等こそ先づ出來合の坊主役。十念授けてこまさうにも都度々々には邪魔らしや。一度にかためて授けるが。うぬらが爲には百年めいざ來いやつと力士立。詞ヤア廣言なる骨佛と。地前後左右より十文字。鑓先揃へて突出す。詞ひらり早業すつかり素鑓。ほぐれる片鎌踏落せば。後をつく棒しつかと取り。しりへを狙ふは不敵やつ。左樣に甘うはさすまたも引きたくつて打折つたり。手取にせよとどつと寄る當るを幸ひ砂石の如くほり飛ばされ。逃行く奴ばら餘さじと奥ふかくこそ。三重へ行先の。地御殿々々に銀燭を挑ぐる張綾錦紅葉の殿の御簾卷上げ妹姫の今樣を。遊覽せんと入鹿大臣。詞ヤア女ばら。そち達姫が殿へ參り。用意よくば始めよと言ひ來れよ。地早う〳〵といらたての。ッシ使重る樓に。橘姫は今宵こそ。よき折烏帽子水干のオクリ衣紋も。はでのウタヒ舞の袖。地檜垣の陰より淡海公。弓矢つがうて忍び寄る。目當は入鹿が胸先へ。羽響高く切つて放す。苦もなく摑んで大音聲。詞ヤア宿直はなきが早や參れ。地承ると彌藤次玄蕃。走りかゝつて打ちかくる心得たりと ッシ切結ぶ。地姫は寶劍振袖に。押隱す間も阿修羅の如く。樓目がけ駈來る入鹿。支へ隔つる官女ども。はらり〳〵と投落し。飛びかかつて摺摑む。遁れぬ所と橘姫。寶劍下へ投捨つれば。取得る淡海支へる兩人。ッシ打合ひ〳〵いどみ行く。地見るに。ハア〳〵我が身も。鷲に捉れし雛鶴の。詮方涙顆ひ聲。詞ヲヽさぞお腹が立ちませう。其お怒をさせますも。皆自らが徒から。地赦して給はれ兄上と。スエ歎き詫ぶるを。はつたと蹴やり。詞ハヽヽ鈴刀に等しきなまくら物。こと〳〵しく箍置

きしは。劍を餌に天皇始め。鎌足親子もおびき寄せ齧にする此計略。誠の劍を安々と。きやつら如きに奪はれんや。エエ。スリヤ今の劍は僞りとな。ヲヽ我が帶せしこそ十握の劍。地扨はと立寄る肩先を。拔手も見せず丁ど切る。折から吹出す笛の音に。聞入る入鹿は醉へるが如く。勇氣碎けてかつぱと伏せば。コハリ不思議や劍は拳を離れ。忽ち化したる龍の形。雲にうねり。雨をさそうて舞下り。松の梢をさら〳〵〳〵。ナホスさつと飛入る御溝の水。白浪さわぎどう〳〵とゆすりあふるゝ。ヲシすさまじさ。地橘姫は手疵も忘れ。守り詰めしが。詞ヲヽそれよ怪しと思ふ心より龍とも蛇とも見ゆれども。正しき十握の御劍ならずやたとへ誠の惡龍なりとも。何か恐れん夫の爲。腮にかゝり死ぬるとも厭はぬ〳〵。地再びもとの寶劍と。顯はれ給へと心願し。ひらりと飛込む水煙。逆立つ浪に打立てられ。遙に。流れ〳〵くる江戸枯枝に取付く身は浮草。オクリたゞよひへながら間近く寄れば。金龍頭を振返し。コハリ紅花の舌をひら〳〵〳〵。ひらめく。背鱗を鳴し。浪間を分くれば續いてわけ。潛ればくゞり。沈めば沈み命限りと追廻せば。地又も虛空に立ちのぼる。此方も岸にかけ上れど。叶はぬ思ひ身をあせり足も空なる雲行を目當に。こそは。ヲシ慕ひ行く。地次第に更くる夜嵐に。つれて聞ゆる人馬の音。貝鐘太鼓亂調にヲシ打立て〳〵関の聲。道具屋官軍隨へ鎌足公。薄紫の狩衣に。肌は腹卷着込を着し玄上太郎御供にて。ヲシ悠々然と入り給へば。地二人の敵を討止めて立出づる淡海公。金輪五郎詞を揃へ。詞我が君御賢察の如く。入鹿が有樣稀代の此笛併し十握の御劍の儀は。ホヲ氣遣致すな最早我が手に入つたるぞよ。其子細は豫てより徒黨を集むるかたらひ山。絶頂によゝ登れば。黑雲俄に覆ひかゝり。一つの金龍我が袖に落つるや否や。十握の御劍と顯はれます。今よりは彼の山を龍が岳と號くべしと。地仰も高き多武の峰此大臣のヲシ靈嶺なり。地玄上太郎進み出で。詞ヤア〳〵入鹿。汝是迄朝恩厚く蒙りながら。王位を犯す天罰の。只今歸すると知らざるや。地見參やつと呼ばはつたり。眠り臥したる兩眼を。くわつと見ひらきうなり聲。詞ヤア事々しや鎌足。我に刄向はんなんどとは。鷄卵を以て岩石にあたらんとするより危き巧み。地目に物見せてくれんずと遙の樓よりヲシ飛び下りたり。地玄上太郎金輪五郎双方より引包んで切りかくる。ちつとも怯まぬ勇猛力。弓手になぎ捨て馬手にかなぐり。追立て〳〵追廻し。鎌足目がけ飛びかゝる。騷がず神鏡手にさゝげ。入鹿が頭に

指向け給へば。鏡に映る降魔の相和光のきらめき眼も眩み。勢ひ絶えたぢ〳〵。隙を窺ふ勇氣の兩人。腰の番をしつかと組む。シヤ面倒なと兩手に提げ打付け〳〵。膝に引敷き動かせず。鎌足後につつと寄り。神通希代の燒鎌に。水もたまらず搔切つたる。首は其儘虚空に上り。火焔をくわつと吐きかけ〳〵。飛鳥の如く翔け廻る。ヲシ一念の程ぞ恐ろしき。地淡海きつと見口に唱ふる重獸品。忽ち治る朝敵の。しげきが本を打拂ふ。鎌足の德劍の德。實に譽ある藤原氏。花の紐解く橘姫。誠をてらす神鏡は。神の御影の尊くも。臨思へば伊勢とナホスお三輪が菩提。賤の緒環繰言を。くり返したる言の葉を末に傳へし。物語

第五

地逆徒凶賊直ちに退き。年盡き新に春の空。都を江州志賀に移され。今ぞ長閑けき大内山主上の叡慮安らかに。フシ猶奥深き玉だれや。地中央の座には中臣の内大臣鎌足卿。同じく淡海義士の面々。玄上太郎利綱一子三作諸共に。清涼殿に居並べば。鎌足の大臣は治國の褒祿沙汰あり。入鹿が妹橘姫親兄に代へ忠義の貞節。豐代姫と名を改め。淡海が宿の妻と我が君の勅諚なり。又大判事清澄は。暫く敵の臣下となり。四海を治むる智謀の勞。詞にも述べがたし向後武官の司とし三作を養子となし。志賀之助清次と名乘るべし。地其外に太宰の後室金輪五郎を始めとし。各々大祿賜りてフシ主上を初め一座の勇み。地かゝる所へ金輪五郎殘黨を搦め取り。凱歌を稱へ入り來れば。故人となりし清舟雛鳥兩人が追福に。妹脊の山とかはれども。かはらぬ志賀の山櫻供養絶えせぬ花の塚。譽を世々の。香に匂ふ折吉し川波春の風幣帛もて拂ふ國の富。市中屋敷と所せきフシ月の遠近松の半。二月の夕暖かに。坂東南海穀。民は至善平かにオクリ秋に米夏に麥。鱗迄も浮める形。千代の並松洛陽に。文作寄き若みどり。惠得の姿滿願の。神は伊勢又春日に八幡。三の惠も鎖常打てばはづさぬ陣太鼓久しき。御代を祝しける

明和八辛卯年
正月廿八日

作者連名

近松半二
松田ばく
榮善平
近松東南
後見 行年七十六歳
三好松洛